

映画用脚本

第28回（2002年）城戸賞最終候補作品

『人畜無害の犯罪者たち』

作 #13

登場人物

生者たち

望月伸雄（男・51） 青果店の主人

望月由紀恵（女・48） 病院の看護師長・伸雄の妻

島崎綾香（女・22） 会社員

宮坂肇（男・26） 大学院生

牛越謙三（男・53） 高瀬警察署署長

辻則之（男・45） 警官

都築三郎（男・58） 刑事

林洋平（男・31） 刑事

中野光彦（男・30） 交番勤務の警官

本部長（男・54） N県警察本部長

飯塚和子（女・42） 主婦

霊魂たち

望月圭太（男・5） 伸雄と由紀恵の息子（一五年前に死亡）

発作男（男・45） 行き倒れになる中年男

喪服の者たち

ヒトシ（30代前半男性の外見） 「黄泉商会」営業部員

クミ（20代後半女性の外見） 「黄泉の園」職員・ヒトシの妹

事務長（50代前半女性の外見） 「黄泉の園」事務長

営業部長（50代後半男性の外見） 「黄泉商会」営業部長

秘書（30代前半男性の外見） 「黄泉商会」営業部長の秘書

【お断り】

本作の登場人物は、次の三つに分類されます。

1・生者 (現在、この世に生きている人間)

2・靈魂 (死んだ人間の肉体から抜け出した魂。人間の死後の姿)

3・喪服の者 (人間の死をビジネスにする、生者でも靈魂でもない者たち。全員が喪服を着ている)

物語の進行に従っていくつかの例外が生じますが、原則として「生者」は、「靈魂」ならびに「喪服の者」の姿を見ることは出来ず、声を聞くことも出来ません。

○ 岩山(夜)

月光が照らすだけの寂しい岩山の頂上。

一人で屈み込んでいた男・権田林、鞆からダイナマイトの束を取り出す。

それを岩の隙間に押し込んだ瞬間、権田林の姿は強烈な光に照らし出される。

警官・岩村が懐中電灯を向けていて、

岩村「叫ぶ」いたぞー！」

駆け出す権田林。

追う岩村。

もう一人の警官・岩谷が合流し、岩場で激しい追跡劇が展開される。

○ 山間の道路(夜)

道路に飛び出した権田林、走って来たトラックに撥ねられる。

権田林の鞆から小型の無線機のような物が飛び出し、草むらに落ちる。

警官たち、それには気付かず、倒れた権田林に駆け寄り、

岩村「救急車！ 至急呼んで！」

○ ファーストフード店(夜)

喪服の男・ヒトシ(30代前半男性の外見)、だらしない格好でマンガ雑誌を読んでいる。

サイレンを鳴らした救急車が、外を通過して行く。

ヒトシ「うるせーよ、救急車……。 (ハッとして) あ、やば……」

ヒトシ、書類鞆を掴んで走り出す。

○ 高瀬中央病院・外観(夜)

救急車が到着する。

○ 同・廊下(夜)

急ぎ足で来た望月由紀恵(48)、一人の看護師に追いつく。

看護師「あ、師長」

由紀恵「患者さんは？」

看護師「二番に入ってます。オペは関先生が」

由紀恵と看護師、手術室に入って行く。

○ 同・手術室(夜)

権田林の手術が行われている。

医師の補佐をする由紀恵。

看護師「心拍停止です！」

医師「心臓マッサージ、急いで！」

心臓マッサージが始まるが効果はない。

瀕死の権田林、幻影で自分の人生のハイライトを見ている。

脳裏に甦る子供の頃、青春時代、結婚……。

突然、幻影にテロップが出る。

「提供・榊極楽」

幻影のナレーション「この走馬灯は、豊かな死後の生活を提案する『株式会社極楽』の提供でお送りしました」

部屋の隅にいた「榊極楽」という腕章をした喪服の男(以下「極楽」)が、手術台の権田林に歩み寄る。

その姿は、由紀恵たち生者には見えない。

極楽「(権田林に)この度は誠に御愁傷様です。しかし、悲しまれる必要はございません。私ども『株式会社極楽』では、お客様に生き生きとした死後の生活を送っていただくため、真心で御奉仕をさせていただいております。当社の特長を簡単に御説明いたしますと、まずポイント制ということがございます。例えば四十九日の時には……」

鞆から出したパンフレットを広げて権田林に説明をする極楽。部屋の壁を通り抜け、息を切らせたヒトシが現れる。

ヒトシ、「黄泉商会」と書かれた腕章を着けながら、極楽を押しつけて権田林に、

ヒトシ「この度は御愁傷様です。私ども『黄泉商会』では、死者の皆様一人一人に最適の……」

権田林の片手が弱々しく持ち上がる。

蘇生術を続けていた看護師が気付いて、

看護師「先生！」

息を飲んで見守る由紀恵たち、ヒトシ、極楽。

権田林の指が極楽をさす。

権田林「弱々しく、あ、あんたの方で……」

由紀恵「えっ？（誰もいないのに……）」

権田林、がつくりとこと切れる。

極楽「御利用ありがとうございます」

医師「午後九時三七分。（看護師に）外で待ってる警察の人たちに知らせてあげて」

看護師「はい」

極楽、もう一人の権田林（肉体を抜け出した靈魂）を連れて歩き出す。

極楽「ではまず、お客様にしばらくお過ごしいただくことになる、当社のリゾートセンターの方に御案内いたします」

極楽、得意気な顔をヒトシに向けると、権田林の靈魂と共に壁を通り抜けて部屋を出て行く。

ヒトシ「（ため息）あーあ」

○ 高瀬市の風景（翌日）

日本アルプスの麓、紅葉の山々に囲まれた小さな町のどかな風景。

商店街の一角に「望月青果店」がある。

○ 望月青果店・店内

店の主人・望月伸雄（51）と、客の主婦・飯塚和子（42）がいる。

飯塚「……でね、次の選挙の時もまた電話がかかって来たんですよ、その同じ人から。もう三回目でしょ。しつこ過ぎると思いませんか？ 私もいい加減に頭に来てたから……」

伸雄、長話に適当な相槌を打ちながら棚の整理をしている。
そこに帰って来る由紀恵。

飯塚「あ、由紀恵さん、お帰りなさい」

伸雄「お帰り」

由紀恵「ただいま」

伸雄「ゆうべ電話したらさ、キャンセルが出たとかで今夜なら予約取れたんだよ、あのフランス料理屋。一日早いけど、いいよね」

由紀恵「うん」

伸雄「飯まだなら、アジが冷蔵庫にあるから」

由紀恵、答えずに店の奥の方（住居部分）に去って行く。

飯塚「ねえ、デート？」

伸雄「はい？」

飯塚「ほら、フランス料理」

伸雄「ああ、そんなじゃないですよ」

飯塚「いいの？ 奥さん、何か怒ってるみたいだったけど？」

伸雄「たぶん大変な手術でもあったんでしょう。夜勤明けは大抵ああいう調子ですよ」

飯塚「そう？ ねえ、お店、あの市役所の近くに新しく出来たあれでしょ？

『ラ・何とか』だったか『リ・何とか』だったか。ああ、そういうえば……」

聞いているふりで仕事を続ける伸雄。

○ 「黄泉の園」・外観

幼稚園のような外観の施設。

やって来たヒトシ、近くにいた職員（喪服姿）に挨拶して門を入って行く。

○ 同・庭

幼い子供たちの霊魂が大勢遊んでいる。

その片隅に、黒いエプロン姿（※喪服の一種とします）のクミ（20代後半女性の外見）と、数人の幼児の霊魂がいる。

手拍子をしながら歌うクミ。

クミ「(歌) 一つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため、三つ積んでは…」

歌に合わせて石を積んでいる子供たち。

歩いて来るヒトシに気付き、クミの歌が止まる。

子供「せんせー」

クミ「あ、ごめんごめん。じゃあ、オニ役の人、みんなが積んだ石の山を崩してあげて下さい」

オニ役の子「はい」

×

×

ヒトシとクミ、子供たちから少し離れたブランコに座っている。

クミ「愚痴なら聞かないよ」

ヒトシ「え？」

クミ「他にどんな用で兄貴がここに来るの？」

ヒトシ「相変わらず思いやりがないな、お前」

クミ「また、営業成績のこと？」

ヒトシ「課長が目ヒンむいてさ、これ以上下がったら雪山の遭難者担当に回すぞ、だって…。ひどい話だろ。まるで俺がいつも仕事サボってるみたいにさ」

クミ「違うの？」

ヒトシ「何だよ、お前までそういうこと言うのか？(一人の子供を指して)ほら、あの子だって、この間俺が勧誘して来た子だろ」

クミ「三浦健也君？」

ヒトシ「うん。借金で心中した一家のさ」

クミ「ガスだっけ？」

ヒトシ「いや、今どき珍しくスキヤキに毒」

クミ「でも、この間って言うけど、あれもう二年以上前だよ。それに兄貴、あの後は大口契約一件も取れてないんでしょ」

ヒトシ「何で知ってんだよ、そんなこと」

クミ「本社じゃ結構有名な話だって聞いたよ」

ヒトシ「いろいろ新しい薬とか出て来てさ、俺の担当の病院でも最近、患者がなかなか死なないんだよ。まずは死んでもらわなきゃ俺も勧誘のしようがない訳でさ」

クミ「確かに数は減ってるみたいだけだね。あっちの世界、高齢化社会とか

でお年寄りがあまり片付かなくなってるって聞くし」
ヒトシ「だろう。(大きなため息) あーあ、何か新しい疫病でも流行らないかな
……。薬も手術も何も効かないようなヤツがさ」

○ フランス料理店・店内(夜)

落ち着いた雰囲気のお店。

テーブルに着いた伸雄と由紀恵。

伸雄「じゃあ一日早いけど、五〇マイナス一歳の誕生日おめでとう」

由紀恵「(笑って) 嫌な言い方」

二人、ワインで乾杯。

伸雄「美味しいの、これ？」

由紀恵「あなた、さっき味見させてもらったじゃない」

伸雄「分からないよ、あんな少しじゃ」

由紀恵の手元にはプレゼントの包み。

由紀恵「これ、開けてみていい？」

由紀恵、包みを開ける。

出て来たのは、派手なデザインの腕時計。

伸雄「ほら、アラーム付いたの欲しいって言ってたから」

由紀恵「でも、これ、若い人がするよなのじゃないの？」

伸雄「そんなことないよ。(時計を受け取って) ほら、これアラームだけじゃ
なくて、いろんな機能があるみたいだよ」

伸雄、時計のボタンを適当に押してみる。

由紀恵「駄目よ、またそんなふうにやたらとボタン押すと……」

突然、腕時計が甲高い電子音を発する。

迷惑そうに振り向く周囲の客たち。

伸雄、時計をいじり回して何とかアラームを止める。

由紀恵「ほら。だから新しい機械はまず説明書読まなきゃ駄目って、いつも言
ってるじゃない」

伸雄「でも、こういう物のボタンって、つい押してみたくなるだろう？」

由紀恵「(苦笑) 悪い癖よ。あなた、そうやって圭太のオモチャも沢山壊しちゃ
って、いつも圭太に……」

由紀恵、ハツとして口をつぐむ。

伸雄も暗い表情になる。

伸雄「明日で一五年か……」

由紀恵「うん……」

伸雄「圭太、一人で何してたんだろ。あの時、あの神社で……」

○ 一五年前(由紀恵の夢)

夕暮れ時。林の中の寂れた神社。

長い石段を一人で上る望月圭太(5)の小さな背中(顔は見えない)。

境内に入る直前に足を踏み外した圭太、石段を転落していく。

○ 望月家・寝室(夜)

由紀恵「圭太！」

跳ね起きた由紀恵、夢だったと気付く。

枕元に置かれた腕時計(伸雄のプレゼント)が電子音を発している。

その液晶画面には「AM0:00アラーム」の表示。

由紀恵、枕元の明かりを点けて腕時計を手取る。

由紀恵「どうやって止めるの……？(隣で寝ている伸雄に)あなた、これの説

明書早く見つけといてよ」

伸雄、寝たまま唸って返事をする。

アラームが止まる。

由紀恵「もう……」

明かりを消そうとした由紀恵、手を止める。

タンスの上に飾られた圭太の写真(明かりが届かず、圭太の顔は良く見えない)。

それをじっと見つめる由紀恵。

由紀恵「……」

突然、由紀恵の視界が歪み始める。

由紀恵「え？」

由紀恵の目に映る部屋、大きく歪んで、やがて元に戻る。

由紀恵「(呆然)何、今の……？」

○ N県警察本部・外観(翌日)

○ 同・本部長室

デスクで書類に目を通す県警本部長（男・54）。

ドアにノックの音。

幹部A「失礼します」

二人の県警幹部が入って来る。

幹部A「本部長、一昨日の夜に高瀬市の県道で事故に遭い死亡した男ですが、身元が判明しました。権田林久司、三八歳、無職。現住所の高瀬市内のアパートを捜索したところ、爆発物の入手法を記したメモや事故現場付近の詳細な地図などが発見されました。何らかの犯罪が計画されていた可能性もありますので現在……」

本部長「（遮って）どうして、それを私に？」

幹部A「は？」

本部長「現在県内で捜査中の事案はそれだけじゃないだろう。どうして、それだけをわざわざ私に報告する？」

幹部A「それは……」

幹部B「高瀬市のことでし、その……」

本部長「……まあいい。とにかく高瀬署との連絡を密にして、手抜きなく捜査に当たるように。いいね」

二人の幹部、頭を深々と下げ、

幹部A・B「はい、失礼いたしました！」

○ 高速道路「高瀬」出口

田園地帯にある高速道路の出口。

車体にサビの浮いた軽自動車が出て来て、交差点の赤信号で止まる。

その車内。

運転席にはスーツ姿の宮坂肇（26）、助手席には島崎綾香（2

2）が乗っている。

肇「ねえ……」

綾香「ここ左」

肇「さつき、高速降りたら運転代わってくれら……」

綾香「言ってるじゃない」

肇「……」

綾香「そんなもの（スーツ）着て来るから疲れるんですよ。ほら、信号青」
車を発進させようとする肇。

しかし、エンジンは急に止まってしまふ。
肇 「あれ……」

肇、何度かキーを回すがエンジンは掛からない。

× ×

のどかな風景の中に駐車した軽自動車。
ボンネットを開けてエンジンを修理していた肇、ワイシャツに
オイルがついていることに気付く。

肇 「あっ！」

肇、慌てて手で拭き、染みを更に広げてしまふ。

運転席の綾香、呆れ顔。

綾香 「ねえ。だから、何でスーツなの？」

肇 「だって、それは……。違うの？」

綾香 「何が？」

肇 「高瀬市って、綾香さんの実家がある所だよね」

綾香 「だから？」

肇 「うん……」

綾香 「だから何？」

肇 「俺を連れて来てくれたってことは、もしかして、その、俺のことをや
つとお父さんに……」

綾香 「ええ？」

一瞬言葉を失った綾香、爆笑する。

肇 「……」

綾香 「(笑いながら)何を期待してるの、貧乏だけがウリのダブリ大学院生の
くせに。話したよね、同窓会だって、高校の時の」

肇 「……エンジン掛けてみて」

綾香がキーを回すと、エンジンが掛かる。

肇 「でも、実家には行くんでしょ？」

綾香 「(急に真顔になり)何で？」

肇 「だって、お母さんは亡くなったって聞いたけど、お父さんはまだお元
気なんだよね？ 綾香さん、お父さんのことって全然話してくれない
けど……」

綾香 「行く訳ないでしょ、あんな所」

肇 「え？」

綾香 「ほら、修理終わったんなら、さっさと乗って。行くよ」

肇 「あ、うん」

綾香 「早く」

慌てて助手席に乗り込む肇。

綾香、乱暴に車を発進させる。

○ 高瀬中央病院・待合室

ヒトシが入って来る。

患者たちに混じって、極楽ともう一人の喪服男がいる。

ヒトシ 「あーあ、今日はエンマ・コーポレーションの奴までいるよ……」

近くで患者と話していた由紀恵、目を擦る。

歪んでいる由紀恵の視界。

患者 「目、どうかしました？」

由紀恵 「ごめんなさい、ちよつと……」

歪みが治った由紀恵の視界には、ヒトシや極楽の姿が見えていく。

入院患者について歩く極楽。

極楽 「この爺さん粘るね。そろそろ逝ってくれた方が、息子夫婦も俺も助かるんだけどな」

それを見て眉をしかめる由紀恵。

救急隊員 「そこ、あけて下さい！」

救急隊員たちが、ケガ人を乗せたストレッチャーを押しに行く。

目を輝かせ、その後を追う極楽ともう一人の喪服男。

ベンチであくびをしていたヒトシも立ち上がるが、由紀恵に腕を掴まれる。

由紀恵 「ちよつと待って。あなたたち何なんですか？」

ヒトシ 「え？ あの、急いでるんですけど」

由紀恵 「ここ病院ですよ。そんな格好で、さっきから患者さんに失礼なことばかり……」

ヒトシ 「やめて下さいよ。見たでしょう、今の人、頭蓋骨がきれいに陥没してたの。あんな上客、滅多にいないんだから早く行かないと……（由紀恵に自分が見えていることに気付き）ええっ!？」

周りの人たち、けげんな顔で由紀恵を見ている。

由紀恵 「(周囲を気にして)ほら、大きな声出さないで。皆さんの迷惑でしょう」
通りかかった看護師、不安げに、

看護師「あの、師長……、どうしました？」

由紀恵「あ、上条さん。この人たち、さっきから……」
看護師「この人たち？」

ヒトシ、手を振り解いて逃げ出す。

由紀恵「あ、待ちなさい！」

後を追う由紀恵。

呆気に取られる看護師、患者たち。

○ 同・屋上

他には誰もいない屋上。

逃げて来たヒトシに由紀恵が追いつく。

由紀恵「あなた、どういうつもり？」

ヒトシ「女性、ですね？」

由紀恵「え？」

ヒトシ「血液型はAB？」

由紀恵「私？ ……そうだけど」

ヒトシ「RHマイナスの？」

由紀恵「ええ」

ヒトシ「視力は？」

由紀恵「両方とも二・〇」

ヒトシ「子供の頃、何か命に係わるような病氣しました？」

由紀恵「確か、小三の時に肺炎。危なかったみたい」

ヒトシ「じゃあ、右の肩に大きなホクロが……」

由紀恵「三つ」

ヒトシ「で……、四九歳？」

由紀恵「そう、今日が誕生日。どうして知ってるの？」

ヒトシ、がっくりと膝をつく。

ヒトシ「いるんだ、本当に……」

由紀恵、訳が分からない。

○ 居酒屋・前(夕方)

「歓迎・高瀬高校3年2組同窓会様」の看板が出ている。

停まった肇の車から綾香が降りる。

肇「綾香さん、この前、新宿で飲んだ次の朝に自分で言ったこと覚えてる？」

綾香「何？」

肇「その……、お酒は適量が一番美味しいってこと」

綾香「言ったっけ、そんなこと？」

やっ来て来た同級生が声をかける。

同級生「あれ、綾香？」

綾香「あ、ヒロコ、久しぶり！」

肇「じゃあ俺、先に旅館行ってるから」

綾香「どこでもいいよ、電話して五分で迎えに来られる所なら」

綾香と同級生、話しながら店に向かう。

同級生「彼氏？」

綾香「まさか。ボランティアの運転手」

肇、ため息と共に車を出す。

○ 望月青果店（夜）

伸雄、慌てた様子でシャッターを閉める。

○ 望月家・居間（夜）

店の方から伸雄が入って来る。

伸雄「お待たせ」

由紀恵とヒトシが座っている。

由紀恵「あなた、（ヒトシを指して）この人、死神さん」

ヒトシ「だから、その『死神』ってのはやめて下さいって言うてるでしょう」

伸雄「（由紀恵に）そこにいるの？」

由紀恵「（ヒトシに）ほら」

ヒトシ、しぶしぶ湯飲みを持ち上げる。

伸雄「ああっ！……いるんだ、本当に。（湯飲みに向かって）あ、どうも、

はじめまして、望月です。（由紀恵に）で、死神さんは今日はどういう

……？」

ヒトシ「いや、ですから『死神』じゃ……」

由紀恵「圭太のことなの」

伸雄「圭太？」

由紀恵「この死神さん、とても親切な方でね」

ヒトシ「は？」

由紀恵「私が圭太のこと話したら……、驚かないでね。圭太のことを話したら

死神さん、もう一度圭太に会わせてあげましょうかって……」

伸雄「え……(絶句)」

ヒトシ「(伸雄に)いや、親切も何も、ほとんど脅迫だったんですよ。この病院じゃ営業出来ないようにしてやるとか……」

伸雄「それはつまり、あの世から圭太を連れて来てくれるっていう……」

由紀恵「そう、そうなの」

ヒトシ「あ、それ。その『あの世』って言い方もちよっと……」

伸雄「本当に？」

由紀恵「ええ」

伸雄「圭太が……」

由紀恵「死神さんの妹さんが先生をしている幼稚園にね、運良く圭太がいたんですって」

伸雄「圭太……」

由紀恵「そう……。そうなの、あなた……」

伸雄「由紀恵……」

感極まって涙ぐむ伸雄と由紀恵。

ヒトシ「あの、ちよっと……」

由紀恵「……ああ、そうね。(伸雄に)その幼稚園が明日から一週間休みになるんですって。だから、その間だけなんだけど……」

伸雄「一週間……。(湯飲みに)で、圭太はいつこっちに……」

ヒトシ「そうですね、呼吸器内科と脳神経外科に一人ずつそろそろの人がいるんで、この後、一度病院に戻って……」

由紀恵「(伸雄に)今すぐ行って、連れて来てくれるって」

ヒトシ「えーっ？」

由紀恵、横目でヒトシを睨む。

ヒトシ「分かりました。行きますよ、行きやいいんでしょ」

ヒトシ、ぶつぶつ言いながら壁をすり抜けて部屋を出て行く。

伸雄、机の上の湯飲みに深々と頭を下げ、

伸雄「ありがとうございます。どんなお礼をしたらいいのか分かりませんが、もし、私たちに出来ることがあれば何でも……。ああ、由紀恵は病院に勤めていますので、きっと何かお役に……」

由紀恵「あなた、もう出てった」

伸雄「ああ、そうか……」

伸雄「ああ、そうか……」

伸雄、大きく息をつくが我に返り、

伸雄「おい、のんびりしてられないぞ。圭太の好きなハンバーグ、あとそれから……、あ、まだ、スーパー開いてるか？」

由紀恵「大丈夫、ほら（指さす）」

食材入りのスーパーの袋が置かれている。

○ 居酒屋・店内（夜）

盛り上がっている同窓会の若者たち。

同級生たちと談笑する綾香。

同級生A「皆、きつと綾香は来ないよって言ってたんだよ」

綾香「えー、どうして？」

同級生A「だって、綾香、もう絶対帰って来ないって言って東京に出てったし」

同級生B「そう、何か、よっぽどこにいたくないみたいだったじゃん」

綾香「ああ、別にこの町が嫌だった訳じゃなくてね、ただ自分の家が嫌だっただけ」

ただけ」

同級生A「何で？ 皆うらやましがってたよねえ。お父さん、あんな立派な人で。綾香のお父さん、今確か……」

綾香「笑って）やめよ。いいでしょ、私の親父の話なんて。（店員に）すみ

ません、梅サワーおかわり下さい。一番大きいので」

○ 「黄泉の園」・事務室（夜）

明かりの消えた室内。

ヒトシとクミ、懐中電灯を使って名簿を調べている。

クミ「（声を潜めて）じゃあ、その師長さん、鬼門パターン全部条件満たして

たんだ。年齢、血液型、病歴……」

ヒトシ「そう、ホクロの数まで」

クミ「じゃあ、左足は水虫？」

ヒトシ「それはさすがに聞かなかったけど、俺の姿が見えたってことはそうなんだろうな」

クミ、名簿のページをめくり、

クミ「あった。望月圭太君は一三号室」

○ 同・寄宿舎の一三号室（夜）

そっとドアを開け、暗い室内を覗き込むヒトシとクミ。

数人の子供たちの霊魂が寝ている。

ヒトシ「どれ？」

クミ「目が暗い子」

ヒトシ「は？」

クミ「圭太君、すごく暗い目してるの。だから、起きてれば誰にでもすぐ分かるんだけど」

ヒトシ「暗い目ねえ……」

ヒトシ、部屋の明かりを点ける。

クミ「慌てて」ちよっと、見つかるよ」

ヒトシ「手を叩き」ほら、ガキ共起きろ、朝だぞ！」

クミ「やめてよ」

起き出す子供たち。

それを見回したヒトシ、迷わずに指さし、

ヒトシ「あの子か」

クミ「見て」そう」

部屋の隅に、一五年前の神社と同じ服装の圭太の霊魂（死亡時のまま5歳）がいる。

じっとヒトシたちを見ている圭太の目は底抜けに暗い。

○ 黄泉商会・ゲート室（夜）

「OUT」と書かれたドアの前に、老若男女の霊魂が列を作っている。

喪服の係員が、ドアの脇で一人一人をチェックしている。

中年女性の霊魂が係員に書類を渡す。

係員「書類を見て」外出の目的は恨みですね？」

女の霊魂「ええ、亭主の所に」

女の霊魂、幽霊風に手を構えて、

女の霊魂「おどろおどろしく」あの子と別れないと呪い殺すわよ……、つて練習したんですけど、どうですか？ 怖くなかったですか？」

係員「無視して」形態の選択はどうします？」

少し離れた所にある「STAFF ONLY」と書かれたドアの前。

圭太を連れたヒトシとクミが、人目を避けてやって来る。

圭太は肩掛け鞆を持っている。

クミ「圭太君、会社に内緒で不正規に連れ出す訳だから、形態の選択は出来

ないよ」

ヒトシ「ゲータイのセンタク？」

クミ「姿を見えないようにしておくとか、現れたり消えたり出来るようにするとか、古風に下半身だけ消しておくとか、もしくはその逆とか……」

ヒトシ「ああ、あつちの世界の人たちに姿が見えたままになるってことだろ。

いいよ、むしろ見えてなきや話になんない」

ヒトシ、ドアの脇の数字キーを押す。

○ 高瀬市某所（夜）

誰もいない空き地。

何もない空間に忽然とドアが現れる。

○ 黄泉商会・ゲート室（夜）

ヒトシ、ドアを開ける。

ドアの向こうは空き地。

ヒトシ「クミに」じゃあ、あと頼むわ」

クミ「私は何とか誤魔化しとくけど、兄貴の方こそ大丈夫なの？ もし会社の人にバレたりしたら……」

ヒトシ「アウト。即クビ。でも俺、このままじゃ、あのおばさん師長のせいだ雪の日本アルプス決定だからさ」

ヒトシ、圭太の手を引いてドアをくぐる。

ヒトシ「悪いな、今度飯でもおごるよ。……あ、それともあれか、男紹介してやろうか？ どうせ、寂しい毎日送ってるんだろ？」

クミ「大きなお世話」

クミ、ドアを閉める。

○ カラオケボックス（夜）

同級会の二次会。

すっかりデキ上がった綾香、隣の同級生Aにからんでいる。

綾香「……仕事仕事ってそれもいいけどさ、自分の奥さんが倒れた時くらい仕事休んで帰って来いっつーの……。ねえ、それであの親父、母さんが死んだ時何て言ったと思う？ ……ねえ」

同級生A「（困り果てて）さあ……」

綾香「ちよっとお。さあ、じゃないでしょ」

同級生 A、近くの同級生 B・C に、

同級生 A 「(小声) まだ見つからないの?」

同級生 B・C、携帯電話(綾香の物)の電話帳を見ている。

同級生 B 「運転手さんの名前、確かミヤモトとかミヤサカとか言ってたけど…

…」

からみ続けている綾香。

綾香「私、あの男だけは絶対許さないから」

○ 旅館・客室(夜)

肇、ノートをめくりながら携帯電話で話している。

ノートに書かれているのは、複雑な数式やグラフ。

肇 「……そこにサンプル4とサンプル5。で、脚注は修正した方。……う

ん、じゃあお願い。急に掛け掛けて来ちゃって悪かったけど」

電話の相手は学生風の男の声。

学生(電話)「帰りはいつ頃になります?」

肇 「休み三日取れたって、綾香さん言ってた」

学生(電話)「宮坂さん、車出しただけじゃなくて、どうせずっと運転もさせら

れたんでしょう?」

肇 「ううん。高速降りてからは綾香さんが……」

学生(電話)「惚れた弱みとは言いますが、宮坂さん、余りにも弱過ぎませんか?」

キヤッチホンの音。

肇 「ごめん、別の電話かかって来た。じゃあ、悪いけどよろしく。また電

話するから。(電話を切り替え) はい。……ああ、そうです。私です、

運転手です。……(恐縮して) お騒がせしてすみません。今どちらで

すか?」

○ 高瀬市商店街(夜)

人通りの絶えた道。

圭太の手を引いたヒトシが歩いて来る。

ヒトシ「一五年ぶりだった? 久しぶりのこっちなんだからさ、お前、もう少

し嬉しそうな顔しろよ」

圭太、暗い目でヒトシを見上げる。

ヒトシ「……まあ、いいけどさ」

前方に望月青果店が見えてくる。

ヒトシ「おい、お前んちだぞ、良かったな」

足を止める圭太。

ヒトシ「どうした？」

圭太、首を横に振る。

ヒトシ「まさか、お前、ここまで来ていて帰りたくないなんて言うなよ」

ヒトシが手を引くが圭太は動かない。

圭太、望月青果店とは違う方向を指す。

ヒトシ「何？ あつちがどうした？」

突然、「ぐわっ」という叫び声。

ヒトシを見ると、脇道の奥で一人の中年男（45・以下「発作

男」が、胸を掻きむしりながらバツタリ倒れる。

ヒトシ「(圭太に) いいか、ここにいろよ。すぐ戻るから絶対動くな！」

ヒトシ、脇道の発作男に駆け寄り、

ヒトシ「この度は御愁傷様です。私も黄泉商会では、死者の皆様一人一人に

最適の……」

一人残された圭太。

その横に肇の軽自動車が止まる。

肇 「(運転席から顔を出し) ボク、どうしたの？ こんな時間に一人で、そ

んな暗い目をして」

脇道では、肉体から抜け出した発作男の霊魂がヒトシに、

発作男の霊魂「だっておかしいって。俺が死ぬ訳ないよ。若い頃から食事には

気をつけてきたし、去年からは毎朝ジョギングもやってるしき、それ

に人間ドックも毎年……」

ヒトシ「お気持ちわかります。そうおっしゃる方大勢いるんですよ。でも…

…」

ヒトシ、通りで圭太が自動車に乗ろうとしているのに気付く。

ヒトシ「あ！」

ヒトシ、発作男の霊魂に自分の名刺を押し付け、

ヒトシ「(慌てて) 気が変わったら、そこに書いてある所に来て下さい。二四時

間いつでも係員がいますから」

ヒトシ、走りかけて足を止め、

ヒトシ「それから、忘れずに私の紹介だって言ってお下さいね。名前、そこに書

いてありますから。お願いしますよ！」

ヒトシ、通りに駆け戻る。

ヒトシ「おい、こらー！」

しかし間に合わず、圭太を乗せた肇の車は走り出してしまふ。

○ 肇の軽自動車（夜）

圭太、後部座席に座っている。

ルームミラー越しに話しかける肇。

肇「お家はどこ？ 送ってあげるけど、その前に一ヶ所だけ寄り道させてね」

○ 高瀬市商店街（夜）

車を追って走って来たヒトシ、息を切らせて足を止める。

遠ざかって行く肇の車。

ヒトシ「あーあ」

○ カラオケボックス・前（夜）

肇と同級生たち、泥酔した綾香を自動車に押し込む。

肇「どうもすみませんでした。後は責任をもって引き受けますから」

同級生たち、口々に挨拶して中に戻って行く。

車内の綾香、圭太に気付き、

綾香「目が暗っ！ 誰、この子？ どこでさらって来たの？」

肇「さらってなんていないよ。さっき一人で歩いてたから家まで……」

綾香「はあ？」

肇「え？」

綾香「情けない男。何、あんた、こんな子一人も誘拐出来ないの？」

肇「誘拐？」

綾香「よし、分かった。じゃあ、私も誘拐手伝ってあげる。こんな時間に子供を放っておくような親はね、ロクなもんじゃない。うん、誘拐、決まり」

肇「綾香さん、今夜はまた随分……」

綾香「何？ もしかして私が酔っ払ってるとか思ってる？」

肇「いや、そんなことは……」

綾香「大学院生頭いいんですよ。考えといてよ、明日の朝までに誘拐のやり方。あのお金……、何だっけ？ ほら、あの誘拐のお金」

肇「身代金？」

綾香「そう、そのミノ、キロ、シンもいっぱい取るから」

肇「でも、あの、綾香さん……」

綾香「いいよね!？」

肇「(反射的に) はいっ! ……でも、誘拐って言うのは犯罪だし……」

見ると、綾香はもう寝息を立てている。

困り果てた表情の肇。

○ 高瀬市商店街(翌朝)

○ 望月青果店・店内

シャッターが一部だけ開いた薄暗い店内。

伸雄が古びたレジを見つめている。

○ 一五年前(伸雄の回想)

望月家の居間。

用意されたおやつを一人で食べる圭太。

冷蔵庫には貼り紙。

「こんやもびよういんにいくことになりました。おかあさんのたんじょうかいは、あしたにします」

×

×

望月青果店。

伸雄が業者から、真新しいレジ(前のシーンと同じ物)の説明を受けている。

業者「売上げを分類して記録する場合は、説明書のここにも書いてありますが……、あ、それはまだです!」

伸雄、レジのボタンを適当に押している。

派手に白紙を吐き出すレジ。

業者「もう、勘弁して下さいよ、またやり直しじゃないですか」

伸雄「すみません、何かこう、ボタンを見るとつい……」

伸雄、圭太が足元にいることに気付く。

伸雄「どうした?」

店の客が伸雄に声をかける。

客「ちよつといいい?」

伸雄「あ、はい。(圭太に) 奥行って遊んでな。この間、ロボット買ってやっ

ただろう。あの新型のかっこいいヤツ」

伸雄、客の方に向かう。

一人とり残された圭太、店を出て行く。

○ 望月青果店・表

由紀恵、心配そうな表情で立っている。

シャツターをくぐり、伸雄が出て来る。

由紀恵「ねえ、やっぱり遅過ぎるよね？」

伸雄「うん。……でも分らないよ。あの世って、俺たちが思っているより、

ずっと遠いかもしれないし」

伸雄、シャツターに貼り紙をする。

「都合により、本日二一日より一週間、臨時休業します」

伸雄「お前、本当にいいのか？ 病院一週間も休んで」

由紀恵「うん。西村さんによくお願いしといたから」

伸雄「そう？」

由紀恵「だって、圭太帰って来るんだから。……今度はあんな寂しい思いさせ

たりしちやいけないよ」

伸雄「うん……」

伸雄、空を見上げ、

伸雄「暖かいな、今日……。もしかしたら、あの日もこんな日だったのかも

しれないな。俺たち、二人とも忙しくて、そんなこと感じてる余裕も

なかったんだろうけど……」

店の前にたたずむ二人。

その姿を、物陰から肇がデジカメで撮影している。

○ 「黄泉の園」・事務室

クミ、一人で名簿を棚に戻している。

クミ「あれほど元に戻しとけて言ったのに……。兄貴、何か足のつく物落

としたりとかしてないでしょうね」

「黄泉の園」事務長（喪服・50代前半女性の外見）が入って

来る。

事務長「あら、来てたの？」

クミ「(慌てて) おはようございます」

事務長「熱心ね。せっかく子供たちが休みだっというのに」

クミ「いえ」

事務長「今日、特別何もないから、あなた自分の用事済んだら上がった方がいいよ」

クミ「はい」

ドアにノックの音。

事務長「はい」

二人の喪服の男が入って来る。

黄泉商会営業部長（50代後半男性の外見）と秘書（30代前半男性の外見）。

秘書「お仕事中止になります。黄泉商会営業部の者ですが、少々お聞きしたいことが」

事務長「何でしょう？」

秘書「こちらにいる子供さんのことです。五歳の男の子で名前は……、（手にした書類を見て）望月圭太君と言うんですが」

クミ「！」

○ 高瀬市民球場

高校生の野球の試合を眺めているヒトシ。

ヒトシ「行け、頑張れ！」

盗塁した走者がタッチアウトになる。

ヒトシ「何だ、気合が足りないよ。滑り込みは死ぬ気で行け、死ぬ気で」
打者がデッドボールを受ける。

ヒトシ「よし、やっちなまえ。乱闘だ乱闘！ そのバット、球打ってるだけじゃもつたないぞ」

礼儀正しく頭を下げる投手。

ヒトシ「（ため息）やっぱり高校野球じゃ勧誘は無理か……」

携帯電話のベルが鳴る。

ヒトシ「（電話に出て）はい……。ああ、お前か。それがさ、連れてく途中ではぐれちゃったんだよ。でも、一週間は大丈夫なんだろう？ その間には必ず探すからさ。あのおばさん師長には適当なこと言っとけば……。え？」

○ 「黄泉の園」・事務室

名簿を見ている事務長、営業部長、秘書。

クミは隠れるように電話をかけている。

クミ「だから本社の営業部長が……、そう、お宅の部長さんが圭太君探しに来てるの。詳しいこと分かったらまた電話するから、とにかく圭太君すぐ見つけといて」

名簿から顔を上げた事務長、クミに、

事務長「あなた、こちらのお二人を一三号室に御案内して差し上げて」

クミ、慌てて電話を切り、

クミ「は、はい」

○ 高瀬市民球場

ヒトシ、切れた携帯電話を手に、

ヒトシ「ええっ？」

○ 旅館・客室

デジカメを持った肇が帰って来る。

二日酔いの綾香、頭を抱えて座っている。

肇「あ、おはよう。大丈夫？ 何か冷たい物でも買ってこようか？」

綾香、答えず布団に横になる。

肇、デジカメをテレビに接続し、撮影して来た画像を表示する。

肇「これが御両親。鞆に名札付いてたから家はすぐ分かったんだけど……。

ねえ、やっぱり二人ともすごく心配してるみたいで……」

綾香、肇を睨む。

肇「(慌てて)ああ、もちろんちゃんと考えていたよ。こんな方法どうかな。

やっぱり一番難しいのは身代金の受け渡しだと思うんだけど、ここを通ってる電車、線路が単線、一本でしょ。だから駅で列車の行き違いのための停車があるよね。それを利用したらどうかと思うんだ。まず電話して、金を持って南本宮の駅に來させて、あ、この駅が無人駅だつてことがポイントなんだけど……」

綾香、肇を睨み、

綾香「(かすれ声) 大きな声出さないで」

肇「あ、ごめん」

綾香「もう……。そんな興奮して、あんた何の話してるの？」

肇「え？ ゆうべ言つた誘拐の……」

綾香「何？ ……ああ、それよりもさ、あの目が暗い子、誰？」

部屋の隅から二人を見ている圭太。

肇「(ため息)……まあ、そうだよね」

×

×

肇、圭太を連れてドアに向かう。

肇「この子の家、八百屋だったから何か果物でも買って来るよ。水気のあ
る物なら少しは食べられるでしょ」

綾香、布団から顔を出してテレビ画面を見ている。

伸雄と由紀恵の画像。

それをじつと見る綾香。

真剣な表情。

綾香「……誘拐って、警察出て来る？」

肇「え？」

綾香「警察」

肇「うん、多分。でも、さっき説明した計画は一応それも計算に入れて……」

……

綾香「じゃあ、OK。やるよ、誘拐」

綾香、頭痛をこらえて起き上がる。

肇「え？」

綾香「ほら、グズグズしてないで。誘拐の手順その一は何？」

○ 望月青果店・店内

シャッターの下から店内を覗いた主婦・飯塚、伸雄を見つけて
嬉しそうに入ってくる。

飯塚「どうしたの望月さん、一週間もお休みなんて？ それより、ねえ、知
ってます？　そこで行き倒れがあったって。ゆうべ聞こえたでしょ、
救急車の音。私も見には行かなかったけど、何かなって思ってたのよ。
で、朝になつてから行ってみたら警察が来てるじゃない。それで……」

伸雄「(話を中断させようと)あの……」

飯塚「あ、ごめんなさい。ちよっとニンジンとタマネギだけ分けてもらえな
いかと思って。でね、岡本さんのご主人に聞いたら、中年の男の人が
心臓か肝臓か何かの発作で倒れて……」

店の奥、住居の方から顔を出した由紀恵が、伸雄を手招きする。

伸雄「(飯塚に)ちよっと、すみません」

伸雄、由紀恵の方へ行く。

由紀恵「(小声)早く帰ってもらって。もし圭太が帰って来るところ見られたりしたら……」

伸雄「うん。俺も努力はしてるんだけどさ」

店の方から電話のベルが聞こえて来る。

飯塚の声「望月さん、電話」

由紀恵「あの人に知られたら大変よ。あんないつもの調子で、すぐにあちこち行って……」

電話は、飯塚の目の前で鳴っている。

飯塚「望月さん、ねえ」

伸雄は戻って来ない。

飯塚「もう……。 (電話に出て) もしまし、望月青果ですけど」

○ 旅館近くの公衆電話

ガチガチに緊張した肇、裏返った声でメモを読み上げる。

肇「子供は預かっている。返して欲しかったら今日の午後二時までに、番号不揃いの一万円札で一千万円用意しろ。警察には絶対に知らせるな。金の受け渡しの方法は……」

○ 望月青果店・店内

飯塚「どこにかけてます？ このウチには子供なんていませんよ」

飯塚、一方的に電話を切る。

伸雄が戻って来る。

飯塚「間違い電話。それが変なの、子供は預かったとか言って。何だかあれ

みたい……。そう、誘拐の脅迫電話」

伸雄「え？」

由紀恵、店の奥から駆け出して来て、

由紀恵「誘拐!？」

○ 旅館近くの公衆電話

受話器を置いた肇、綾香に、

肇「うちには子供いないって……」

綾香「あんた、家を間違えたんじゃないの？」

肇「でも、あの子の名札通りの住所だったし、望月青果店って看板出てたし……」

綾香「どうせ、また何か見落としたんでしょ。ちゃんと表札であの子の名前確認するとかしたの？」

肇「それはしてないけど……」

綾香「そんなことだと思った。ほら、突っ立ってないで、もう一度行って確かめて来て」

○ 望月青果店・店内

伸雄「一千万円、二時まで……」

飯塚「あと、警察には絶対に知らせるなって」

青ざめた顔の伸雄と由紀恵。

飯塚「あ、私そろそろお昼の準備しないと……」

重い空気から逃げ出すように出口に向かった飯塚、振り返り、

飯塚「ニンジンとタマネギ……」

気付かない伸雄と由紀恵。

飯塚、諦めて出て行く。

伸雄「いたずら電話……、だよな？」

由紀恵「うん。でも……」

伸雄「タイミングが良過ぎるか……」

由紀恵「ねえ」

伸雄「ん？」

由紀恵「とりあえず警察行ってみない？」

伸雄「(考えて) うん、そうだな。こんな電話があったって話してみるだけで

も……。あ、やっぱり駄目だ」

由紀恵「大丈夫よ。もし電話が本物でも、犯人には気付かれないように上手くやってくれるはずよ。ほら、よくテレビのドラマで……」

伸雄「いや、そうじゃなくて。……俺たち、誰が誘拐されたって言えばいい

んだ？」

由紀恵「あ……」

○ 「黄泉の園」・庭

沢山の子供たちの靈魂が遊んでいる。

その片隅にクミ、営業部長、秘書。

クミ「ここにもいないようですね。あと、考えられる所と言ったらどこでしょう。全くだ。全くだ。全くだ……」

由紀恵「分かってる」

伸雄「うん」

伸雄、急ぎ足で出掛けて行く。

○ 旅館・客室

布団の上でのびている綾香。

携帯電話のベルが鳴る。

綾香、顔をしかめて電話を取り、

綾香「うるさいな。もっと静かに鳴らしてよ、頭痛いんだから。……で、分かったの？」

○ 望月青果店・表

肇、遠くの物陰に隠れて店を窺いながら携帯電話で話している。

店はシャッターが一部開いているが、人の姿は見えない。

肇「まだなんだけど、でも、店だから表札も出てないし、かと言って、直接訪ねて行って聞く訳にもいかないし……」

綾香（電話）「もう、ぐちゃぐちゃ言ってないで。方法なんて考えればいくらでもあるでしょ。例えば……」

肇「うん？」

綾香（電話）「……（思いつかない）」

肇「……綾香さん？」

突然、店の中から由紀恵が出て来て、

由紀恵（大声）「あなた、そこで何してるの!？」

驚き身をすくめた肇、恐る恐る顔を出す。

由紀恵が話しかけているのは、シャッターから中を覗き込んでいたヒトシ。

肇「？」

店の前、由紀恵と話すヒトシ。

ヒトシ「いや、圭太君、元氣かなって思って、ちょっと様子を見て……」

由紀恵「圭太をどうしたの？」

ヒトシ「は？」

由紀恵「あなた、何か知ってるんでしょう？」

ヒトシ「（とぼけて）あれ、もしかして圭太君、まだ帰ってないんですか？ ……
…変だな。ゆうべ、そこまでは送って来たんですけど、後はどうして

も一人で行くって言うから……」

物陰の肇、ヒトシと話す由紀恵を不思議そうに見ている。

綾香（電話）「もしもし、どうしたの？」

肇 「あれ、何してるのかな？ 圭太君のお母さん、相手もないのに一人で喋ってるけど……」

○ 旅館・客室

綾香「一人で……？」

綾香、ハツとして布団から跳ね起き、

綾香「大変、すぐにそこ離れて！」

肇（電話）「え？」

綾香「警察に知らせたんだよ！」

○ 望月青果店・表

肇 「警察？ どうして？ 激しく独り言を言ってるだけで別におかしいところは……」

綾香（電話）「分からないの？ 無線だよ！ 隠し無線で警察と話してるんだ

よ！」

肇 「！（青ざめる）」

綾香（電話）「とにかく見つからないうちに、早くそこ離れて！」

○ 旅館・客室

綾香、携帯電話を切る。

綾香「やっぱり出て来たね……」

満足そうな笑みを浮かべる綾香。

圭太がじっと見ている。

綾香「慌てて真顔」何見てんの」

○ 望月青果店・表

由紀恵とヒトシ、話している。

ヒトシ「でも、それって本当に誘拐ですかね？」

由紀恵「どういうこと？」

ヒトシ「ゆうべ圭太君、何だか家に帰りたくないみたいな感じでしたよ」

由紀恵「え？」

ヒトシ「生きてる時、あの子のこと大事にしてあげました？　ちゃんと可愛がってあげました？　……よくいるんですよ、親を恨んでる子。この間も親に虐待されて自殺した女の子に会ったんですけど、親を恨んでるかって聞いたたら、そりやもう死ぬほど憎いつて」

由紀恵、シヨックを受けた様子。

由紀恵「そんな……、圭太はそんな……」

店の中から電話のベルが聞こえる。

ヒトシ「電話ですよ」

由紀恵「え……？　（気付いて）あっ」

由紀恵、急いで店の中に入って行く。

逃げるように立ち去るヒトシ。

○ 同・店内

由紀恵、緊張の面持ちで受話器を取る。

由紀恵「はい……。　（安堵）ああ、あなた」

伸雄（電話）「あれから何か連絡は？」

由紀恵「まだ」

伸雄（電話）「そうか……。　下ろせる分全部下ろして、何とか一千万円出来た。

本当にギリギリだったけど。これから金持ってすぐそっちに戻るから」

由紀恵「うん」

由紀恵、受話器を置く。

由紀恵「……圭太、帰りたくないの？」

○ 高瀬市商店街の脇道

ゆうべ発作男が倒れた場所に、遺族たちが花を供えている。

懸命に遺族に話しかける発作男の霊魂。

発作男の霊魂「なあ、そんなことやめろよ春子。ほら、正志、お父さん死んで

なんかいないだろう？」

近くに肇の軽自動車が停まっている。

その車内では、肇が何度もキーを回しているがエンジンは咳き

込むだけ。

肇「こんな時に……」

やって来たヒトシ、肇の車に気付き、

ヒトシ「あ、ゆうべの！」

車内の肇、ようやくエンジンが掛かる。
ヒトシが駆け寄るが、寸前で車は発進してしまう。

○ 道路

狭い路地を徐行で走る肇の車。
ヒトシ、懸命に走って後を追う。
広い道路に出た肇の車、速度を上げる。
引き離されたヒトシ、辺りを見回す。
後方から一台のスポーツカーが猛スピードで走って来る。
ヒッチハイクのポーズで、その進路に立つヒトシ。
スポーツカー、そのまま止まらずヒトシを轢いた？

○ スポーツカー

後部席にヒトシが座っている。
運転しているのは若いカップル。
前方を走る肇の車との距離、どんどん縮まっていく。
ヒトシの携帯電話が鳴る。

ヒトシ「電話に出て）はい。……おう、どうした？」

○ 「黄泉の園」・事務室

クミ、事務長から隠れて電話をしている。
クミ「どうした、じゃないでしょ。圭太君がいないのバレちゃったよ。部長さん、信頼出来る営業部員の人たちに連絡して圭太君探させるとかって……」
ヒトシ（電話）「え、変だな。俺のところ、何も言っていないけど」
クミ「当然でしょ。あと、そっちの世界の警察に捜索願を出すって。……ただ子供が一人いなくなったただじゃ、普通そこまでしないよね。絶対に何か訳ありだよ。とにかく一番先に圭太君見つけて、何とか誤魔化さないと……」

○ スポーツカー

ヒトシ「大丈夫。安心しろって」
窓の外、赤信号で止まった肇の車が急速に近づいて来る。
ヒトシ「今もう、あのガキを連れてった奴の車捕まえたから、これからそっち

に乗り換えて……」

運転席の若い男、急にハンドルを切る。

スポーツカー、道端のラブホテルの駐車場に入ってしまった。

ヒトシ「ええーっ、昼間から!？」

信号が変わり、肇の車は遠ざかって行く。

○ 高瀬市商店街の脇道

遺族が立ち去り、一人立ち尽くしていた発作男の霊魂、つぶやく。

発作男の霊魂「……やっぱり死んだのか、俺」

○ 高瀬警察署・外観

○ 同・内

電話を受けている刑事・林洋平(31)。

林「はあ……。ええ、確かにFAXは受け取りましたけど……。(手にした紙を見て)五歳、男の子、暗い目……。至急探して欲しいって、この子がどうしたんです?」

○ 黄泉商会・ある一室

受話器を手にした営業部長、戸惑う。

営業部長「それは……」

秘書、メモを走り書きして見せる。

営業部長「(メモを読んで)誘拐……。そうです、誘拐されたんです! 事は一刻を争います。お願いします。その子を見つけて下さい!」

○ 高瀬警察署・内

林「はあ、なるほど、誘拐ですか。では、これから調べてみまして、何か分かったら連絡しますのです。はい」

電話を切った林に、近くにいた刑事・都築三郎(58)が話しかける。

都築「イタズラか?」

林「ええ。暇な人がいるもんですね。こんなFAXまで送って来ましたよ」
林、手元の紙を都築に渡す。

それは黒で縁取られた圭太の顔写真。

林 「どうします？ 放つといていいですよ」

都築 「そもいかなだろう。俺、ちよつと行って来るよ」

林 「都築さん？」

都築 「いや、今日は暖かいから膝の具合が良くてな。さっきから散歩に抜け出す口実探してたんだよ」

○ 望月家・居間

電話が鳴る。

札束を数えていた伸雄と由紀恵、緊張して手を止める。

伸雄、恐る恐る受話器を取り、

伸雄 「もしもし……。 (驚き) えっ、警察に？ そんな、そんなことしていません。警察になんて知らせていません」

息を飲んで聞いている由紀恵。

伸雄 「本当です、嘘じゃありません。だって、知らせようにもあの子は……」

伸雄、必死。

伸雄 「じゃあ、どうですか、こうすれば信じてもらえますか？ あなたの目的はお金なんですよね？ それなら……」

○ 旅館近くの公衆電話

肇 「ええっ!？」

驚いて固まる肇。

綾香 「何？」

肇、受話器の口を押さえて、

肇 「……一億円」

綾香 「え？」

肇 「警察に知らせてないこと証明するために、一億円出すって言ってるけど……」

綾香、一瞬絶句し、

綾香 「……いいんじゃない、くれるって言うならもらっとけば」

○ 望月家・居間

伸雄 「……はい、分かりました。必ず行きます」

伸雄、電話を切って由紀恵に、

伸雄「金を持って、俺たち二人で南本宮の駅に來いって。三時ちょうどに、
そこで次の指示を出すからって……」

由紀恵「三時……」

時計は一時一五分をさしている。

由紀恵「でも、どうするの？ 一億円なんて。あなた、何か当てでもあるの？」

伸雄「そんな、ある訳ないだろう」

由紀恵「じゃあ……」

伸雄「でも、仕方ないだろう。ああでも言わなきゃ、そのまま電話切られて
たぞ。そうしたら……」

由紀恵「うん……」

伸雄「……でも、どうする？」

○ 旅館・駐車場

綾香と肇、圭太を連れて歩いて来る。

肇「何かおかしなことになってきたし、やっぱりやめた方がいいんじゃないかな」

綾香「この計画、警察が出て来ても大丈夫なんですよ」

肇「いや、やっぱりまずいかも……」

綾香、停めてあった軽自動車の助手席に乗り込む。

圭太を後部席に乗せ、肇は運転席へ。

肇「でも綾香さん、どうしてそんなに誘拐に熱心なの？」

綾香「別に」

肇「だって犯罪だよ。それに圭太君の御両親もすごく心配してるみたいだ
ったし……」

綾香「うるさいな。暇だから。それでいい？ ほら、早く車出して」

肇「……」

車のキーを回す肇。

しかしエンジンは全く反応しない。

肇「あれ？」

鈍い爆発音が響いてボンネットから煙が上がる。

×

×

ボンネットを開けてエンジンを調べていた肇、顔を上げ、

肇「今度は完全に駄目。(安堵の表情) 残念だけど車が使えないんじゃないや、計
画は……」

綾香「私、車盗んで来る」

肇「え？」

綾香「もともと、このクズ鉄じゃ不安だったからね。丁度いいよ」

肇「盗むって……、車を？」

綾香「今そう言ったでしょ。……ああ、あんたはこの子と部屋で待ってて。

頭痛の原因は二日酔いだけで充分だから」

○ 由紀恵の乗用車

町の通りに停められた乗用車の中。

運転席に由紀恵、助手席に伸雄がいる。

伸雄「本当に仕方ないのかな……。お前、病院で何とか借りられないか？」

由紀恵「一億円なんてとても無理よ。……ねえ、仙台のお義兄さんなら、もし

かして……」

伸雄「会社倒産して先月夜逃げしたばかりだろう。……なあ、一軒じゃ無理

でも、街金を何軒か回って分けて借りれば……」

由紀恵「うん……。でも、もう時間が。あと一時間もないんだから……」

伸雄「……やっぱり仕方ないのか。(決心して)よし、じゃあ、行って来るよ」

伸雄、目出し帽をかぶり布袋を持つ。

由紀恵「気をつけてね。エンジン掛けたままにしとくから。忘れ物はない？」

伸雄「うん」

車を降りた伸雄、「N信用金庫」の建物に向かって歩き出す。

○ N信用金庫・店内

おどおどと入って来た目出し帽の伸雄、窓口で書類を処理している行員Aに、

伸雄「あ、あの……」

行員A「はい」

伸雄「あの、黙ってこの袋に一億円……」

行員A「(顔を上げず)順番でお呼びしますので、番号札を取ってお待ち下さい」

伸雄「あ、はい」

番号札を取る伸雄。

行員A「どうぞ、ベンチにお掛けになって」

伸雄「はい」

ベンチに座る伸雄。

周囲の客たちの不審そうな視線。

伸雄、居心地が悪い。

台の上に置かれた信用金庫のマスコット人形が、間拔けな顔で伸雄を見ている。

伸雄「……」

入口の近くで行員B・Cが話をしている。

二人、表の道を走る警備会社の輸送車を見て、

行員B「あれ？ あの輸送車、ウチか？ 今日は予定なかったよな」

行員C「黒川支店ですよ。今朝、本店から連絡があったじゃないですか」

行員B「声を潜めて」ああ、あれか。あの急に二億円運ぶことになったってや

つか」

行員C「ええ」

行員B「でも、大丈夫なのか？ あそこのガードマン、この前も大金運んでる

時、車無人にしてビデオ屋に寄ってたらしいぞ」

それを聞いた伸雄、立ち上がる。

○ 由紀恵の乗用車

不安そうに待っていた由紀恵、助手席の菜切り包丁に気付く。

由紀恵「あ、忘れ物……」

信用金庫を出た伸雄が、走って乗り込んで来る。

由紀恵「(包丁を差し出し) これ？」

伸雄「あの車追って！」

由紀恵「え？」

伸雄「あの現金輸送車、早く！」

伸雄、遠ざかって行く輸送車を指さす。

○ 旅館・客室

肇、圭太に話しかける。

肇 「綾香さん、どうしたんだろううね、随分張り切って……。綾香さんって怖いお姉さんに見えるかもしれないけど、本当はすごく優しい人なんだよ。ここに帰って来るのは久しぶりみたいな顔してるけど、毎年お母さんの命日にはお墓参りに来てるって俺知ってるし……。でも、お父さんとは何かうまくいってないみたいなんだよな……」

圭太は暗い目で見返すだけ。

携帯電話が鳴る。

肇 「電話に出て」 はい」

綾香（電話）「私。なかなかいい車が見つからなくてね。ちょっと遠くまで来ちゃって、そっちに迎えに行く時間なくなったから、あんた子供連れて自分で南本宮駅に向かってくれろ？」

肇 「え、でも、俺一人じゃ……」

綾香（電話）「いいね。じゃあ、この車の持ち主帰って来るとマズいから」

一方的に切れる電話。

肇 「（圭太に）……本当は優しいんだよ」

○ 同・フロント

肇と圭太、階段を下りて来る。

旅館の従業員が、刑事・都築と話している。

従業員 「五歳くらいの男の子、ですか？」

都築 「ええ」

従業員 「名前も分からないじゃねえ……。ゆうべは大きな宴会もあったし、

それだけじゃなんとも……」

都築 「（写真を見せて）この子なんです」

従業員 「なんだ。いやだなあ、刑事さん。目が暗いんなら暗いって、早くそう言っただけよ。ええ、この子ならゆうべから泊まっていますよ。確か、

若いカップルと一緒に」

聞いていた肇、慌てて物陰に隠れる。

都築 「その部屋、案内してもらえますか」

肇、階段を上って行く都築と従業員をやり過ごす、圭太を連れて出口へ急ぐ。

○ 警備会社の輸送車

山間の道路を走っている。

その車内には二人の警備員。

無線から声が聞こえる。

無線 「本部から三号車」

警備員A 「（無線を取って）はい、こちら三号車、本部どうぞ」

無線 「三号車、緊急です。直ちにその場に停車して下さい」

警備員A 「本部、どうしたんですか？」

○ 由紀恵の乗用車

由紀恵と伸雄（目出し帽はかぶっていない）、輸送車を尾行中。前方で輸送車が停車したのを見た由紀恵、車を止める。

由紀恵「どうしたのかな？」

伸雄「うん」

輸送車は動き出す気配がない。

由紀恵「これ、もしかして……」

伸雄「何？」

由紀恵「チャンス？」

伸雄「……」

伸雄、助手席から降りる。

由紀恵「あなた、無理しないでね。はい」

由紀恵、目出し帽と菜切り包丁と布袋を差し出す。

○ 警備会社の輸送車

警備員B、無線に、

警備員B「三号車から本部。あの映画、まだビデオになったばかりだから新作料金ですよ。それに一泊しか借りられないと思いますけどいいですか？」

○ 山間の道路

草むらに隠れて輸送車に近づく伸雄。

そこは、（冒頭の場面で）権田林がトラックに撥ねられた場所。

伸雄、足元に何か落ちているのに気付く。

拾い上げると、それは（権田林の鞆から落ちた）小型の無線機のような物。

伸雄「？」

伸雄、そこについているボタンをとりあえず押してみる。

道路横の岩山の頂上、権田林が仕掛けたダイナマイトの起爆装置が作動する。

爆発！

崩れた岩が輸送車の周囲に降り注ぐ。

伸雄「（啞然）……」

乗用車内の由紀恵も呆然としている。

崩落が止まり、土煙の中に横転した輸送車が見えてくる。

伸雄、恐る恐る近づく。

車内で気絶している二人の警備員。

伸雄「大丈夫ですか……？」

警備員たち、目を覚まさない。

伸雄、荷台の扉が開いていることに気付く。

覗き込むと、中には同じ形のジュラルミンケースが二つ。

サイレンの音が近づいて来る。

伸雄たちが来たのとは逆の方向から、一台のパトカーが崩落現場に到着。

二人の警官・岩村と岩谷（冒頭の場面に登場）が降りる。

岩村「ひどいな……」

近づいて来る警官に気付いた伸雄、とっさに目出し帽をかぶり、

二つのジュラルミンケースに手を掛ける。

岩谷「伸雄に気付いて」あ、どうしたんですか？ これ、一体何が……」

ケースは重く、二つを持つことは出来ない。

伸雄、片方のケースを抱えて走り出す。

岩谷「あ、待ちなさい！」

追う二人の警官。

追跡劇が展開される。

○ 裏路地

圭太を連れした肇、携帯電話で話している。

肇「あ、綾香さん？ もう駄目だよ、旅館に刑事さんが圭太君探しに来てた。やっぱり、こんなことやめて早く圭太君を御両親の所に……」

綾香（電話）「何言ってるの、人に車まで盗ませといて」

肇「だって、俺一人じゃ出来ないよ。駅に行くまでにだって、他の警察の人がいるかもしれないし……」

○ ワゴン車

綾香、運転しながら携帯電話に、

綾香「そんなこと言ってるあんた、自分で情けないとか思わない？ 何でもい
いから、その子連れて駅まで来て。分かった？ もう切るよ。私、今

運転中……」

突然、誰かが道路に飛び出して来る。

綾香「!」

○ 裏路地

携帯電話から急ブレーキの音。

肇「(驚き)綾香さん? もしもし!?!」

○ 道路

道路に飛び出して来たのは伸雄。

ワゴン車(設備工事店の名が書かれている)、その寸前で停止している。

安堵の息をつく運転席の綾香。

座席の下に落ちた携帯電話から、微かに肇の声が聞こえている。

警官たちの声が近づいて来る。

我に返った伸雄、とっさにケースを抱えてワゴン車の後部座席に乗り込む。

綾香「(戸惑い)あの……」

綾香、目出し帽のために伸雄だとは気付かない。

伸雄「はい? ……あ、今何時ですか?」

綾香「二時半……、ちょっと過ぎてますね」

警官たち、道路に出て来る。

岩村「いた、あの車!」

伸雄、慌てて綾香に、

伸雄「南本宮の駅まで行って下さい!」

○ 裏路地

携帯電話に耳を当てている肇。

肇「南本宮……?」

○ 道路

ワゴン車内の綾香と伸雄。

綾香「はあ……」

伸雄「急いでるんです、お願いします!」

迫って来る二人の警官。

綾香「あ、私も警察はまずいんだっけ……」

車を急発進させる綾香。

警官たち「！」

警官たち、間一髪で身をかわす。

走り去って行くワゴン車。

岩谷「そうか、これが狙いだっただのか……」

岩村「何？」

岩谷「この前、トラックに撥ねられた権田林ですよ。あの夜、奴はあの輸送

車を襲う準備をしていたんです」

岩村「あっ！」

岩谷「まだ仲間がいたんですね。爆破してケースを奪った男と、逃走用の車

を運転していた女……」

岩村「くそっ！ 至急、本署に連絡！」

○ ワゴン車

カーブにさしかかった車内。

座席からずり落ちたジュラルミンケースが、床の携帯電話を潰す。

○ 裏路地

携帯電話の音が途切れる。

肇「もしもし、もしもし！」

諦めて電話を切る肇。

肇「どうしよう……」

困り切っていた肇、やがて、

肇「……行ってみる、南本宮？」

じっと肇を見上げている圭太。

肇「……うん、そうだよね、俺、行かないといけないよね。綾香さん、何か困ってるみたいだったし」

○ 山間の道路

崩落現場に一台の救急車が到着。

降りた救急隊員たち、警備員に応急処置をしている由紀恵に駆

け寄る。

救急隊員「あれ、望月さん？」

由紀恵「二人ともこれと言った外傷はなし。でも、念のために詳しく検査してもらって」

救急隊員「はい」

救急車に運ばれる警備員たち。

由紀恵「じゃあ、あとお願いね」

自分の車に戻ろうとする由紀恵。

救急隊員「あ、望月さんもこっち（救急車）に乗ってもらった方が」

由紀恵「え、私はもういいでしょう？」

救急隊員「いえ、あの警備員さんたちだけじゃないんですよ。さっき、市内で大乱闘がありました。わざとボールをぶつけたぶつけないが原因だつて言うんですが……」

由紀恵、救急車の中を覗き込む。

ケガをした高校野球部員たちが、すし詰めになっている。

由紀恵「ごめんなさい。私、用事があるの。三時までにはどうしても……」

立ち去ろうとした由紀恵、高校生たちが不安そうに見ていることに気付く。

由紀恵「……」

○ 高瀬警察署・表

サイレンを鳴らして数台のパトカーが出て行く。

○ 同・内

騒然とした雰囲気の内。

ヒトシが入って来る。

数人の喪服の男たちがそれに気付く、

喪服 A 「あれ、黄泉商会さん、今日はどうしたんですか？」

ヒトシ 「どうしたって？」

喪服 A 「お宅のサツ回りの人たち、さっき急にどこか行っちゃいましたけど」

ヒトシ 「へえ、あいつらは部長に信頼されてるんだ……」

喪服 A 「え？」

ヒトシ 「いや、俺はちよつと情報収集にね」

ヒトシ、建物の中を歩き回る。

「被害にあった輸送車には、現金二億円が積まれていたと判明！」

「犯人の車、未だ発見出来ません！」

など、輸送車襲撃事件の情報が飛び交う。

都築と林が、署長・牛越謙三（53）に報告をしている。

都築「署長、子供が誘拐されたという先程の電話ですが、あれ、案外いたずらじゃないかもしれません」

ヒトシ、聞きつけて傍に駆け寄る。

都築「森ノ上の旅館『景水館』で従業員の証言が取れました。（圭太の写真を見せ）この子が、両親とは思えない若い男女に連れられて昨夜宿泊していたそうです」

ヒトシ「!!」

○ 田園地帯の道

路線バスが走る。

その車内で、携帯電話をかけている肇。

電話「おかけになった電話は、電波の届かない所にあるか電源が入っていないため……」

電話を切った肇、隣に座る圭太に、

肇「大丈夫。きっと、綾香さん大丈夫だよ。多分、携帯の充電が切れただけ……」

圭太は、前方の座席をじっと見つめている。

そこには親子連れの姿。

行楽の途中らしく、楽しそうに笑い合っている。

肇「……」

停留所でバスを降りて行く親子連れ。

それを目で追った肇、バス停近くに一人の警官がいるのに気が付き、慌てて圭太を隠れさせる。

警官・中野光彦（30）、側溝に落ちた耕運機を道に戻そうとしている。

耕運機の持ち主は年配の女性。

年配女「いつもごめんなさいね、駐在さん」

中野「(笑顔) いいんですよ。私たち、こういうことのためにいるんですから」
止まっていたバスが走り出して行く。

バス車内の肇、安堵。

○ワゴン車

田舎道を走っている。

後部席の伸雄、菜切り包丁を使い、必死でジュラルミンケースをこじ開けようとしている。

運転席の綾香、その音に顔をしかめながらルームミラーで盗み見ている。

包丁の刃が折れる。

綾香「あの……、この車、その辺探せば工具箱くらい積んでると思いますから……」

伸雄「(我に返り) あ、はい。どうも御親切にすみません」

工具箱を見つけた伸雄、目出し帽を脱いで汗をぬぐう。

綾香「(伸雄だと気付く)！」

伸雄、作業を再開する。

伸雄「あ、うるさいですか？」

綾香「いえ、ちよつとゆうべのお酒が残ってるだけですから……。どうしたんですか？」

伸雄「(手は休めずに) はい？」

綾香「いえ、その……」

伸雄「あ、これですか？ ……息子が帰って来るんですよ」

綾香「息子さん？」

伸雄「ええ。これさえあれば……」

必死の表情で作業を続ける伸雄。

綾香「もしかしてそれ、どこから盗んで来たんじゃないですか？ どうしてそんなことまでして……」

伸雄「(独り言のように) 私たち、あの子には何もしてやれなかったから……」

綾香「え？」

伸雄、夢中で工具を振るい続ける。

手を傷つけながらも懸命に。

それを見ていた綾香、ためらいつつ、

綾香「私……、いえ、私の知合いに父親と絶交した人がいるんです。仕事ばかりで家族のことを何も考えていないって……。でも、最近その人、不安になるそうなんです。このままでいいのか、悪いのは本当に父の

方だけだったのかって……。もしかして、もしかしてですけど、その人の父親もあなたみたいに……」

大きな音がし、ケースの鍵が壊れる。

伸雄「やった……」

蓋を開ける伸雄。

伸雄「あれ？」

○ 高瀬警察署・内

署長・牛越と話す都築と林。

ヒトシも横で聞いている。

牛越「……分かりました。では、都築さんは引続きそちらの方の捜査をお願いします。今はこんな状況で、すぐには応援も出せませんが、この子のことは各交番・駐在所にも連絡しておきます」

都築「お願いします。(林に)じゃあ、行くうか」

林・ヒトシ「はい」

都築と林、そしてヒトシ、去って行く。

警官・辻則之(45)が牛越に駆け寄る。

辻 「署長、輸送車襲撃の現場から連絡がありました。積みかかっていた現金二億円、全て無事とのことです」

牛越「何？」

×

×

事件現場のインサート。

伸雄が残っていた方のケースが開けられている。

その中身は大量の札束。

×

×

牛越「では、犯人は何を奪って行ったんだ？」

○ 南本宮駅前

ワゴン車の中、こじ開けられたケース。

その中身は、特大サイズのN信用金庫マスコット人形(間抜け顔)。

ワゴン車は小さな無人駅の前に停まっている。

車を降りた伸雄、運転席の綾香に、

伸雄「どうも、御迷惑をおかけしました」

伸雄、結婚指輪を外して綾香に差し出す。

伸雄「これ、少しはお金になるはずですよ。こんなお礼しか出来ないんですが……」

綾香「いえ、そんな……」

伸雄「いいんです、とっておいて下さい」

伸雄、無理に指輪を渡す。

伸雄「言いにくそうに……それから、私のことを警察に知らせるのは、少
しだけ待つてもらえませんか。……いえ、逃げる訳じゃありません。
一週間だけでいいんです。どうか、息子が帰って来てからに……」

綾香「……分かりました」

伸雄「すみません」

伸雄、駅の時計を見る。三時一分前。

伸雄「あの……」

綾香「(察して)じゃあ、私そろそろ」

伸雄「どうも、いろいろありがとうございました。どうぞお気をつけて」

綾香、車を出そうとする。

伸雄「……ああ、そうだ。きっと後悔していると思いますよ」

綾香「え？」

伸雄「あなたの知り合いの人のお父さんも、きっと私と同じように」

綾香「……」

綾香、車を出す。

○ 南本宮駅近くの交番

表に原付バイクを停めて入って来る中野。

警官・原田昇(21)が敬礼で迎える。

原田「先輩、御苦勞様です！」

中野「ああ、今日も早いね、原田君。いいよ、俺に敬礼なんてしなくても」

原田「は？」

中野「君、刑事志望なんだろう？」

原田「はい」

中野「ならさ、こんな田舎で交番勤務なんて真面目にやっただけ無駄だから。

適当にやって後はお勉強してればいいの。気をつけな、俺みたいにな
りたくなかったら」

原田「はあ……」

中野、机の上の書類を見る。

中野「現金輸送車襲撃に幼児誘拐……。ふーん、大変だねえ。まあ、俺たち『駐在さん』には関係ないけどさ」

中野、駅の方に目をやる。

駅前にいる伸雄の姿が見える。

中野「あれ……。(書類を見直す)身長一七五センチくらい、灰色のジャンパーに紺のズボン……」

その通りの外見の伸雄。

中野、勢いよく立ち上がり、

中野「原田君、事件だ、本署に連絡！」

原田「は？」

中野「は、じゃないだろう！ 凶悪犯人がいるんだよ、現金輸送車襲撃犯が！」

○ 高瀬中央病院・手術室前

「手術中」のランプが消え、医師、由紀恵たち看護師が出て来る。

看護師「次のオペは六番キヤッチャー太田君、大腿骨骨折。一〇分後に開始します」

○ 同・洗面所

入って来て顔を洗おうとした由紀恵、鏡の中の自分を見つめる。

○ 一五年前(由紀恵の回想)

病院のナースステーション。

忙しそうに働く看護師たち。

年配の看護師「望月さん、薬局から電話で、さっきの分一度全部戻して欲しいって。あなた、行ってもらえる？」

由紀恵「はい」

年配の看護師「あと、行ったらついでに安藤先生の所に寄って、明日のオペのこと詳しく聞いて来てちょうだい」

由紀恵「分かりました」

大量の薬が入った箱を抱えて廊下に出た由紀恵、立っていた圭太にぶつかる。
薬がこぼれる。

圭太の肩掛け鞆からは、ドングリがいっぱいに入った小さなビ
ンが落ちる。

床に散らばる薬とドングリ。

由紀恵「(驚き) 圭太！ ここには来ちゃ駄目って言ってるじゃない」

由紀恵、薬を拾い集めながら、

由紀恵「またこんな汚い物(ドングリ) 持って来て……。お願いだから家でい
い子にしてて。……ほら、いつも言ってるでしょ、お仕事がなくなる
お薬のこと。お仕事がなくなるお薬が出来たら、いつでも遊んであげ
るからって」

ドングリを拾い集める圭太。

由紀恵「圭太、早く行きなさい」

圭太、ドングリを拾い続ける。

由紀恵「圭太、行きなさいって言ってるでしょ、分からないの！」

驚いて手を止めた圭太、ドングリとビンを残して走り去って行
く。

年配の看護師の声「望月さん、どうかしたの？」

由紀恵「いえ、何でもありません」

×

×

夕暮れ時、林の中の寂れた神社。

長い石段を一人で上る圭太。

×

×

ナースステーション。

戻って来る由紀恵。

一人の看護師がビニール袋に入れたドングリを差し出し、

看護師「望月さん、これ、圭太君の大事な物だったんじゃないの？」

×

×

足を踏み外した圭太、石段を転落する。

○ 高瀬中央病院・洗面所

由紀恵「！(我に返る)」

一人の看護師が来て、

看護師「師長、御主人から電話です。大急ぎの用だと言ってますけど」

○ 南本宮駅前

駅の時計は、三時一五分をさしている。

電話ボックスで話している伸雄。

伸雄「どうしたんだ、お前？ もう三時とっくに過ぎてるんだぞ。何やってるんだよ、そんな所で」

由紀恵（電話）「そんな所？」

伸雄「まだ犯人から何も連絡がないんだよ。分かっているのか？ お前のせいなんだぞ」

○ 高瀬中央病院・ナースステーション

受話器を手にした由紀恵。

由紀恵「え……」

伸雄（電話）「二人で来いって言われただろう。俺一人じゃ駄目なんだよ。お前も一緒にいなきや駄目なんだよ」

由紀恵「でも、重傷の患者さんが大勢で、私がいないと若い子たちだけじゃ……」

伸雄（電話）「お前、何言ってるんだ？ 圭太よりそっちの方が大事なのか？」

由紀恵「そんな……」

伸雄（電話）「だってそうだろう。つまり、そういうことだろう？」

由紀恵「……」

伸雄（電話）「これじゃ結局、あの頃と同じことの繰り返しじゃないか」

看護師が顔を出す。

看護師「師長、次のオぺ始めます。至急来て下さい！」

由紀恵「……」

○ 南本宮駅近く

圭太を連れて歩いて来た肇、身を隠す。

肇「ほら、お父さんいたよ」

駅前の電話ボックスから出る伸雄の姿が見える。

肇「どうしようか。綾香さん探さなきゃいけないけど、圭太君をお父さんお母さんに見られちゃいけないし……」

圭太、じつと肇を見ている。

肇「……そうだよ。すぐお父さんたちの所に帰りたいよね」

圭太、首を横に振る。

肇「帰りたくないの？」

圭太、駅とは違う方向を指す。

肇「え？ ……ああ、他に行きたい所があるんだ」

圭太、頷く。

肇「お父さんお母さんに知られたら怒られるような所なの？ ……まあいいや。じゃあ、お兄さんが内緒でそこまで連れて行ってあげる」

圭太、肇をじっと見ている。

肇「だって、君のこと誘拐なんてしちゃったんだから、そのくらいはしてあげないといけないよ。……はい」

肇、圭太と指切りをする。

肇「指切りゲンマン嘘ついたら針千本のーます。指切った」

肇、真剣な表情で、

肇「大丈夫。絶対に連れて行ってあげるから」

伸雄を見張りながら物陰伝いにやって来た警官・中野、肇にぶつかる。

中野「あ、すみません…。(ビシッと敬礼して) どうも失礼いたしました！
本官はただ今、凶悪な現金輸送車襲撃犯を監視中でありまして……、あれ？」

圭太に気付いた中野、持っていた書類を見て、

中野「ああつ！ 暗い目！」

肇「！」

肇、圭太の手を引いて逃げ出す。

後を追おうとした中野の横に、数台のパトカーが止まる。
先頭の中から顔を出す牛越。

中野「(緊張) しろ、署長！」

牛越「君が、連絡して来た中野巡查だね」

中野「はい、そうであります！」

牛越、逃げて行く肇を指して、

牛越「では、あの男が？」

中野「はい！」

牛越「御苦労だった、中野巡查」

パトカー隊、急発進して肇を追う。

中野「署長！ 自分も、自分もお供いたします！」

○ 南本宮駅前

伸雄、目の前で起こった突然の騒ぎに啞然としている。

○ 牛越のパトカー

辻が運転し、牛越が助手席に乗っている。

辻、逃げて行く肇と圭太を指し、

辻 「署長、見て下さい。もしかして、あの男に連れられている子供は……」

○ あるコンビニの前

停めた覆面パトカーで無線を聞いていた林、顔色を変える。

林 「ええっ！？（大声で）都築さん、大変です！ 現金輸送車を襲った犯

人、（圭太の写真を示して）この子を人質にして逃走中とのことです！」

店員に話を聞いていた都築とヒトシ、振り返り、

都築・ヒトシ 「何！？」

○ 南本宮駅近くの交番

駅前を立ち去って行く伸雄が見える。

原田 「あ……」

中野が走って戻って来る。

原田 「先輩、犯人（伸雄）逃げちゃいましたけど……」

中野 「分かっている！ だから追うんじゃないか！」

原付バイクにまたがった中野、肇が逃げて行った方向へと走り去る。

原田 「いえ、そうではなくてですね……」

○ 空き地（南本宮駅近く）

停めたワゴン車の横で、壊れた携帯電話を耳に当ててみる綾香。

電話の発信音の代わりにサイレンの音が聞こえ、パトカー隊に

追われた肇と圭太が走って来る。

肇 「綾香さん！」

肇と圭太、ワゴン車に飛び乗る。

綾香も乗り込んで、

綾香 「何、どうしたの！？」

肇、車を急発進させる。

○ 牛越のパトカー

逃げて行くワゴン車を追う。

辻 「あのワゴン車に共犯の女。報告にあった通りです。輸送車を襲った犯人に間違いありません。ただ、男の服装が違いますが……」

牛越 「ああ。逃走時の変装用の服まで用意していたとはな。これは相当緻密に計画された犯行だ。あの中野巡査が気付かなかったらどうなってい
たか……」

○ ワゴン車

懸命に運転する肇。

肇 「圭太君の御両親、やっぱり心配で警察に知らせたんだよ」

綾香 「(つぶやく) そうかな？ そういうふうには見えなかったけど……」

○ カーチェイス

ワゴン車とパトカー隊、危なっかしいカーチェイスを繰り広げる。

○ ワゴン車

綾香、懸命に運転する肇に、

綾香 「(少し不安になって) ねえ、あんたそんなに無理しなくてもいいよ。もし大変なら、どこかでこの子だけ降ろせば私たちが逃げる時間は稼げるんじゃない？」

肇 「うん……。でも、大丈夫」

綾香 「そう？」

肇 「だって俺、圭太君と約束したから」

綾香 「約束？」

圭太、じつと肇を見ている。

肇 「大丈夫、必ず連れて行ってあげる」

真剣な表情の肇。

綾香 「……」

○ 「黄泉の園」・廊下

秘書が険しい顔で足早に歩く。

○ 同・事務室

事務長が一人でいる。
いきなりドアが開き、秘書が入って来る。

事務長「あら」

秘書「先程案内してくれた女性の職員の方、どちらですか？」

事務長「少し前に、頭が痛いと言って帰りましたけど……。どうかしたんですか？」

秘書「至急呼び戻して下さい。彼女に尋ねたいことがあります」

営業部長と一緒に、発作男の霊魂がドアから入って来る。

○ ワゴン車

パトカー隊に追われ、山間の道路を逃げる。

カーブを曲がると、そこは輸送車襲撃現場。

道路に大きな岩が散乱している。

肇「！」

ワゴン車、現場検証中の警官の制止をかわし、間一髪で岩の間をすり抜ける。

ワゴン車が通過した箇所の岩が崩れ、道路は完全に塞がる。

○ 牛越のパトカー

パトカー隊、岩に激突する寸前で急停車。

ワゴン車が遠ざかって行く。

辻「署長！」

牛越、無線機を取り、

牛越「こちら牛越です。都築さん、聞こえますか？」

○ 都築の覆面パトカー

林が運転する車は山道を走っている。

後部座席にはヒトシ。

助手席の都築、無線に、

都築「では、この車を使ってバリケードを？」

牛越（無線）「ええ。犯人の車は真っ直ぐそちらに向かっています。至急その場に停車して道を塞いで下さい」

都築「了解。（無線を切り）聞いたな。やるぞ」

林・ヒトシ「はい！」

ヒトシ「気付いて」……あ、いや、俺は『はい』じゃないんだよ」

覆面パトカー、道を塞ぐように停車する。

○ 中野の原付バイク

懸命に走って来た中野、前方に停車しているパトカー隊を見つ
ける。

中野「(歓喜) いた！」

○ パトカー隊(停車中)

警官たち、道を塞ぐ岩を急いで撤去している。

○ 山道(バリケード地点)

停めた車の前に立つ都築と林、ワゴン車が現れるのを緊張して
待っている。

林「都築さん、もし犯人が止まらずに突っ込んで来たら……」

都築「……」

ヒトシ、二人の背後で車のブレーキを解除し、車体を押し始め
る。

都築たち、気付かない。

林、接近して来るワゴン車を発見し、

林「来ました！」

回避しようとした都築たち、車が道の端に移動していることに
気付く。

林「え？」

都築と林、啞然。

ワゴン車、急速に近づいて来る。

都築と林、慌てて避ける。

ヒトシ、道路の中央に立ってヒッチハイクのポーズを取る。

ワゴン車、止まらずにヒトシを轢いた？

○ パトカー隊(停車中)

岩の撤去を終えた警官たち、パトカーに戻って行く。

牛越「(無線に) 何ですって、失敗!？」

○ 山道（バリケード地点）

都築、無線に、

都築「詳しい報告は後で。とにかく犯人の車はここを通過。まだ走っています！」

○ 中野の原付バイク

必死に走って来た中野、ようやくパトカー隊に追いつく。

しかし次の瞬間、パトカー隊は急発進。

中野「あっ！」

中野、再び追いかけてやろうとするが、岩の破片でバイクのタイヤがパンクする。

○ 「黄泉の園」・事務室

クミ、事務長、営業部長、秘書、発作男の霊魂がいる。秘書、クミに一枚の名刺を渡す。

秘書「この名刺は、こちらの方（発作男）が持っていた物だ」

クミ「確かに兄の物ですが……」

秘書「この方は、昨夜あちらでお亡くなりになったんだが、その時、君の兄さんが幼い子供と一緒にいる所を見たそうなんだ」

クミ「もしかして兄が疑われているんですか？ 子供と一緒にいたからと言って、それが圭太君だとは……」

秘書「この方の話では、その子は……」

発作男の霊魂「ええ、暗い目をしていました」

クミ「！」

営業部長「君は、普段から兄さんとはよく会っているそうだね。圭太君のことも何か知っているんじゃないのか？」

クミ「……」

電話が鳴る。

事務長（電話に出て）はい。……はい、います。お待ち下さい」

事務長、クミに受話器を差し出す。

事務長「お兄さんから」

クミ「！」

秘書「出たまえ。だが、私たちも聞かせてもらおうよ」

秘書、電話のスピーカースイッチを押す。

観念して受話器を取るクミ。

クミ「もしもし?」

○ワンゴン車

後部席の圭太の隣に座り、携帯電話で話しているヒトシ。

ヒトシ「ああ、俺だけど。お前、頼りになる兄貴を持ったことを感謝しろ。捕

まえたぞ、あのガキ」

クミ(電話)「本当!? 今、一緒にいるの?」

ヒトシ「ああ、もう大丈夫。まったく、このクソガキ、手焼かせやがって」

○「黄泉の園」・事務室

一同、歓喜の表情。

クミ「やったじゃない! これで何とか……」

クミ、話を聞かれていることを思い出して口調を変える。

クミ「お兄ちゃん駄目でしょ、圭太君のことそんなふうにつつちゃ」

ヒトシ(スピーカー)「お兄ちゃん? 何だ、気持ち悪いな。安心して気がゆる

んだか? まあ、確かに俺も一時はどうなることかと思っただけどさ。

だって、もしバレてたら……」

クミ、慌ててヒトシの言葉を遮る。

クミ「じゃあ、圭太君、すぐに連れて帰って来られるの?」

ヒトシ(スピーカー)「ああ。まだ少しゴタゴタしてるけど、すぐ片付くから。

それにしても上手くいったよ。こっちの警察を逆に利用してやって、

他の営業の連中にも気付かれずに……」

クミ(遮って)「もう、お兄ちゃんたら、またそんなふうが悪ぶったりして。

協力していただいた皆さんに、ちゃんとお礼言わないと駄目だよ」

ヒトシ(スピーカー)「お礼? お前どうした? ……(声を潜め)あ、まさか、

そばに誰か……」

クミ(遮って)「じゃあ、待ってるから。頑張って早く戻ってね、お兄ちゃん!」

クミ、電話を切ると深々と頭を下げ、

クミ「すみませんでした! 部長さんがお困りのようでしたので、いけない

とは思いますが圭太君のこと、電話で兄に話してしまっただけです。そ

うしたら兄も、ゆうべ偶然、全く偶然に会った圭太君のことが気にな

っていたって……。それで兄は今日、自分の仕事なんてどうでもいい、

部長さんのお役に立てるならって、ずっと圭太君を探していたんです。勝手なことをしてすみませんでした！」

営業部長「(心打たれて) そうか……」

クミ「兄は自分のことよりもまず、人のことを考えてしまう性格なんです。

そのせいでいろいろ誤解もされているようなんですが……」

営業部長「成績が悪くて、問題の多い社員だと聞いていたが、そういうことだったのか……」

クミ「ええ、そうなんです」

営業部長「(秘書に) 君、私たちは彼にすまないことをしてしまったようだな」
秘書「(釈然としないが) はあ……」

○ ワゴン車

ヒトシ「(圭太に) な、いい作戦だろう？ 絶対上手くいくって」

圭太、座席の上で後ずさる。

ヒトシ「ほら、そいつら(肇たち)のためにもなるんだからさ」

じっとヒトシを見る圭太。

ヒトシ「なあ」

圭太、頷きサイドブレーキに手を掛ける。

綾香「(気付いて) 何してるの、それは駄目！」

圭太、ブレーキを引く。

ワゴン車、スピンして止まる。

圭太、車を降りて近くの河原へと走る。

肇「圭太君！」

後を追う肇。

綾香「何？ ちょっと待ってよ！」

綾香も戸惑いながらついて行く。

ヒトシ、遠ざかる圭太に、

ヒトシ「いいな、その辺の岩の陰にでも隠れてるよ！ すぐ戻って来るから！」

ヒトシ、ワゴン車の運転席に移動。

ヒトシ「まったく、手間の掛かるガキだよ」

○ 牛越のパトカー

走って来たパトカー隊、前方を走っているワゴン車を発見する。

辻「いました！」

○ ワゴン車

運転するヒトシ、パトカー隊に気付く。

ヒトシ「来た来た。それじゃあ……」

ヒトシ、急ハンドルで森の中の脇道に入っていく。

パトカー隊もそれを追う。

道の先には深い断崖があり、その下には大きな湖が広がっている。

ヒトシ「お、いいねえ」

ヒトシ、アクセルを更に踏み込む。

○ 牛越のパトカー

ワゴン車が断崖に向かって加速して行くのが見える。

牛越「まさか……」

○ 断崖の上

ワゴンの車体をすり抜け、地面に降り立つヒトシ。

走り続けたワゴン車、柵を突き破って落下。

遙か下方の湖面に激突し、大きな水柱を上げる。

パトカー隊、急ブレーキで停車。

牛越たち、断崖の淵に駆け寄る。

ワゴン車が水中に没していく。

辻 「署長……」

一同、呆然。

○ 湖の畔

パトカー隊が停まり、警官たちが走り回っている。

一人の警官が無線で話している。

警官A「犯人の男女と人質の男の子、三名とも死亡は確実。ただ今から捜索を開始しますが、遺体の回収は困難と思われます」

バイクを押し、疲れ果ててフラフラの中野が到着。

中野、通りかかった警官Bに、

中野「どうなった？」

警官B「もう最悪です。あの高さから落ちたんですからね。助かる訳ありません」

ん。犯人人質全員死亡……。それにしてもまさか、あの二つのヤマの犯人が同一人物だったなんて……」

中野「ああ……。(ふと気付いて)ん、今、二つのヤマって言ったか？」

警官B「ええ。輸送車強盗と幼児誘拐……」

中野「あつ！」

警官B「どうかしましたか？」

牛越が中野に歩み寄る。

牛越「中野巡査、来てくれたのか」

中野「(緊張して敬礼)しよ、署長！」

牛越「私の力が及ばず痛ましい結果になってしまったが、君の働きには感謝しているよ」

中野「いえ、当然の職務であります！」

牛越「どうもありがとう。御苦労だった。後は我々に任せて、ゆっくりと休んでくれ」

中野「(大感激)はいー！」

牛越、去って行く。

見送った警官B、中野を振り返り、

警官B「ああ、どうしたんですか？ 今、何か気付いたみたいな……」

敬礼したまま倒れた中野、幸せな表情を浮かべて気絶している。

○ 河原

ヒトシ、辺りを見回しながら歩く。

圭太たちの姿はない。

ヒトシ「おい、圭太くん！ どこだー!? もう出て来ていいぞー！」

返事はない。

ヒトシ「……またかよ」

○ 林の中の寂れた神社(夕方)

一五年前に圭太が転落した石段。

圭太を背負った肇と綾香が上って行く。

石段を上り切った肇、圭太を下ろす。

神社の境内に入って行く圭太。

綾香「ここなの？」

肇「うん、そうみたい」

綾香「親の目を盗んでまで行きたいなんて、どんな所かと思えば……。今、流行ってるの？ 子供たちの間で神社仏閣って」

肇「さあ」

圭太、木の根元にしゃがみ込んでドングリを拾い集めている。
それを見ていた綾香、ぽつりと、

綾香「……返そうね、あの子」

肇「え、いいの？ 綾香さん、何か考えがあるんじゃないの？」

綾香「ううん。私、あの子の一家に恨みがある訳でもないし、お金が欲しい訳でもないし……。きっと私、自分のことを見ていて欲しかったんだよね、ずっと」

肇「見ていて欲しい？」

○ N県警察本部・本部長室（夕方）

本部長、机に向かっている。

ドアにノックの音。

本部長「はい」

幹部A「失礼します」

幹部A、幹部Bが入って来る。

幹部A「本部長、高瀬市の輸送車強盗と幼児誘拐ですが……」

本部長「そのことなら、もう報告があった。福島君に現地に向かってもらっている。すぐに詳細が入って来るはずだ。……他に何か？」

幹部A「いえ……」

本部長「それより、大谷田村の事故の方はどうなっている？」

幹部A「あ、それは……」

本部長「君たち、私につまらない気を使っている暇なんてないんじゃないのかな」

二人の幹部、深々と頭を下げ、

幹部A・B「どうも失礼いたしました！」

○ 同・廊下（夕方）

歩いて行く幹部A・B。

幹部B「ほら、もう報告があったはずだって言っただろ」

幹部A「でも、もしまだだったら、またヘソ曲げてたぜ。……でも本部長、自分の家があるからって高瀬市のこと、少し気にし過ぎなんじゃないの

か？」

○ 同・本部長室（夕方）

本部長、一枚の写真を見ている。

幹部Bの声「あの人、あそこだけは何としても平和であって欲しいと思ってるんだよ」

幹部Aの声「どうして？」

写真に写っているのは高校生の頃の綾香。

幹部Bの声「家出したお嬢さんが、いつ帰って来てもいいようにってさ……」

○ 「黄泉の園」・外観（夜）

○ 同・事務室（夜）

クミ、事務長、営業部長がいる。

秘書が入って来る。

秘書「あちらの警察は、圭太君は死んだものとして捜査を打ち切りました。

営業部員たちにも再度連絡を取りましたが、未だ何の手掛かりも……」

営業部長「（絶望） そうか……」

クミ、力なく座る営業部長に歩み寄り、

クミ「良かったら教えてもらえませんか？ そうまでして圭太君を見つけない

きやいけない事情って、一体何なんですか？」

営業部長「……そうだな。今となってはもう、頼りに出来るのは君の兄さんだ

けかもしれない。全部話そう。彼に伝えてくれ」

秘書「部長！」

営業部長「いいんだ。このまま時間までに圭太君を連れ戻すことが出来なかつ

たら、我が社の信用は完全に失われる。長期の営業停止処分もありう

るだろう。……もう、私が自分一人の保身を考えている場合ではない。

違うか？」

秘書「……」

○ 高瀬市郊外（夜）

数人の男たちの霊魂が、ゴザを敷いて酒を飲んでいる。

その横でヒトシ、携帯電話に、

ヒトシ「じゃあ、あのガキ探してるって、そういうことだったの？ そうか、

部長のヤツ、それでコソコソ動いてたのか……」

ヒトシ、ふと思いついて、

ヒトシ「あ、じゃあ、秘密守るからって部長に一つ交換条件出しといてよ。あの病院の担当外してくれって。……いや、あのおばさん師長。姿見られたままじゃ俺、やりづらくて……。え、また行くの？ だから俺、あのおばさんは……。ああ、分かったよ。すぐ行くよ、行きやいいんだろ」

ヒトシ、電話を切って霊魂たちに、

ヒトシ「皆さん、どうです？」

男の霊魂A「やっぱり誰も見てないね。暗い目の男の子なんて」

ヒトシ「そうですか……。あ、ごめんなさいね、同窓会の最中に」

男の霊魂B「兄さんも一緒にどうぞ？」

ヒトシ「いや、残念だけど俺、急ぎますんで」

ヒトシ、立ち去る。

霊魂たちが宴会をしているのは、鉄道の踏切の脇。

そこには立看板がある。

「早まるな あなたの人生 一度きり」

○ 高瀬中央病院・職員通用口（夜）

看護師に送られて由紀恵が出て来る。

看護師「師長が来て下さって助かりました。すみません、お休みだったのに」

由紀恵「ううん、いいの。それじゃあ、あとお願いね」

看護師「はい。お疲れ様でした」

由紀恵「お疲れ様」

歩き出した由紀恵、足を止める。

前の道に伸雄が立っている。

由紀恵「……」

伸雄「お疲れさん」

○ 高瀬市商店街（夜）

伸雄と由紀恵が歩く。

由紀恵「ねえ」

伸雄「ん？」

由紀恵「圭太、帰って来るかな？」

伸 雄 「大丈夫だよ。犯人だって金が欲しいんだからさ、きっとまた連絡して来るって」

由 紀 恵 「ううん、違うの」

伸 雄 「違う？」

由 紀 恵 「昼間、あなたが銀行に行ってた時、死神さんが来て言ってたんだけど……。圭太、私たちの所に帰るの嫌そうだったって」

伸 雄 「え？」

由 紀 恵 「……そうかもしれないよ」

伸 雄 「そうか。そうかもしれないな……」

由 紀 恵 「私たち、結局何も出来ないんだね、圭太のために」

二人、望月青果店の前に来る。

シャツターの貼り紙を見る伸雄。

「一週間臨時休業します」

伸 雄 「……」

伸雄が紙を剥がそうとした時、店内から電話のベルが聞こえて来る。

伸 雄 ・ 由 紀 恵 「！」

○ 望月青果店・店内（夜）

伸雄と由紀恵、シャツターを開けて駆け込んで来る。

由 紀 恵、受話器を取り、

由 紀 恵 「はい、望月青果です。……（歓喜）えっ、圭太を？ 本当ですか!？」

ヒトシが店内に入ってくる。

ヒトシ 「こんばんは……」

由 紀 恵 （電話に） はい、分かりました。では待っています」

由 紀 恵、電話を切る。

ヒトシ、由紀恵に近づき、

ヒトシ 「あの……」

由 紀 恵、夢中でヒトシには気付かず、

由 紀 恵 「圭太を返してくれるって」

伸 雄 「え？」

ヒトシ 「（由紀恵に） もしも……」

ヒトシ、由紀恵の肩を叩くが、由紀恵は無意識に手で払いのける。

由紀恵「準備が出来たらまた電話するから、ここで待ってるようにって……」
伸 雄「(歓喜) そうか……」

ヒトシ「(更に由紀恵の肩を叩き) あの、ちょっと……」

由紀恵「(払いのけて) あ、でも準備って何かしら? ……どのくらい時間がかるかも言ってなかったけど……」

ヒトシ「あの……」

大きく払った由紀恵の手、ヒトシの顔を直撃。

由紀恵「(ヒトシに気付き) あっ!」

伸 雄「どうした? ハエ、そんなに大きかったのか?」

ヒトシ「ハエ?」

由紀恵「死神さん……」

伸 雄「え?」

ヒトシ「ちよつと言い過ぎじゃないですか? 人のことハエだとか死神だとか」

由紀恵「何しに来たの?」

ヒトシ「何しにって、そりゃ……。 (思い出して) あ、そう、あのクソガキ……、

いや、圭太君のことなんですけどね。すみませんけど、今日の夜中の

一二時まで、むこうに連れて帰らなきゃいけなくなったんですよ」

由紀恵「一二時?」

由紀恵、壁の時計を見る。

九時三〇分。

由紀恵「でも、どうして? あなた、一週間はこっちにいられるって言ってた

じゃない」

ヒトシ「ええ。それが、ちよつと事情が変わりましたね……」

○ ファミリーレストラン・店内(夜)

客席にいる綾香と圭太。

圭太はボールペンと紙ナプキンで平仮名の練習をしている。

綾 香「違うって。『な』って字はこう書くの。それじゃ反対」

コンビニの袋を下げた肇が来る。

肇 「お待たせ」

肇、袋から取り出したクレヨンの箱を圭太に渡し、

肇 「それでいい? 八色入りしか見つからなかったんだけど」

圭太、頷く。

肇 「(綾香に) どう?」

綾香「まだまだ。何だか、私まで平仮名に自信なくなってきたよ。……『な』
っていう字、これでよかったっけ？」

クレヨンを手にした圭太、およそ字とは思えない物を書いてい
る。

綾香「(ため息) この分じゃ、今夜は徹夜だね」

○ 望月家・居間(夜)

壁の時計は一一時三〇分をさしている。

椅子に座ったまま寝ているヒトシ。

伸雄と由紀恵、電話を前に座っている。

伸雄「一二時までって、一分も遅れちゃいけないんだって？」

由紀恵「うん。一二時ちょうどに始まるんだって死神さん言ってた。……もう、
これ食べていく時間もないね」

机の上には、三人分のハンバーグが並べられている。

それを見ていた伸雄、立ち上がり、

伸雄「俺、その辺探しに行つて来る」

由紀恵「え？」

伸雄「だって、二人でただ電話待っていてもしょうがないよ」

由紀恵「でも、探すつて言つたつてどこを？ それに、あなたがいない間に電
話があつたら、あなた、圭太に会えないわよ」

伸雄「うん……。でも、これが最後だからさ」

由紀恵「最後？」

伸雄「圭太のために何かしてやる最後のチャンス。これで、あいつをちゃん
と送り返してやれなかったら、俺たち……」

由紀恵「……」

部屋を出て行く伸雄。

その直後に電話のベルが鳴る。

由紀恵「電話に出て」もしもし。……はい、ちょっと待って下さい。(受話器
の口を押さえて叫ぶ) あなた！」

○ 公園(夜)

一人でベンチに座っている圭太。

綾香と肇、物陰に隠れてそれを見ている。

肇「圭太君、何だかちよつと緊張してるみたいだね」

綾香「分かるの？ 私には、ただのシンプルな暗い目にしか見えないけど」

肇「何となくだけどね。俺、あの子と今日一日ずっと一緒だったから……」

綾香「（声を潜め）しっ、来たよ」

綾香、公園の入口を指す。

伸雄と由紀恵が駆け込んで来る。

圭太を見つけて足を止める二人。

由紀恵「圭太……」

圭太も両親に気付く。

親子三人、しばらくためらっているが、やがて互いに駆け寄る。

伸雄と由紀恵、圭太を抱き締める。

一五年ぶりの再会。

隠れてそれを見ている綾香たち。

肇「やっぱり、ちゃんと謝つとした方がいいんじゃない？」

綾香「この度は、お宅の御息を拉致監禁の上、身代金の要求などいたしま

してすみませんでしたって？」

肇「でも、黙ったままって言うのも……」

綾香「ああ、そのことなら大丈夫」

ふと圭太の手を見た伸雄、その親指に自分の結婚指輪がはまっ

ていることに気付く。

伸雄「（しばし考えてから）……ええっ!？」

由紀恵「どうしたの？」

伸雄「（圭太に）お前、お姉さんと一緒にいたのか？」

圭太、頷く。

伸雄「頭痛いーっというお姉さんだぞ」

圭太、頷く。

伸雄「……ええっ!？」

由紀恵「何？」

伸雄「ちよつと待って。俺、今、混乱してるから……」

圭太、暗い目で伸雄を見ている。

伸雄と由紀恵、その顔を見て、

由紀恵「ねえ、あなた、圭太ったら……」

伸雄「うん……。 （圭太に）お前、今日はそんなに楽しかったのか？」

物陰の綾香と肇。

綾香「さあて、打ち上げ行こうか」

肇 「打ち上げ？」

綾香 「そう、誘拐お疲れ様の会。探せばまだ、どこか店開いてるでしょ」

綾香、公園の出口へと歩き出す。

慌ててついでに行く肇。

肇 「でも綾香さん、頭痛いんじゃないの？」

綾香 「腕時計を示して」 ほら、もうすぐ明日だよ。一日酔いはもう終わり。それに私たち、明日は敵地に乗り込むんだから、飲んで食べて栄養つけとかないと」

肇 「えっ？ 『敵地』って、もしかしてお父さんの所？ あの、『私たち』

ってことはつまり、俺のことをお父さんに……」

綾香 「そう言えば、今朝デジカメの写真見た時から気になってただけだよ。」

あの二人、圭太君の親にしては随分老けてるよね」

肇 「そう？」

去って行く綾香と肇。

伸雄たちの近く、何もない空間にドアが現れる。

その脇にいたヒトシ、由紀恵に歩み寄って肩を叩く。

由紀恵 「あ、うん……。 (伸雄に) あなた」

伸雄 「え？ ああ……」

伸雄、圭太に向かって改まった口調で、

伸雄 「いいか圭太、よく聞きな。今日はお前に会えて、お父さんもお母さんもとても嬉しかった。……でももう、すぐにお別れしなきゃいけないんだ。(まったく見当違いの場所を指し) この死神さん、知ってるだろう？ お前はこの死神さんと一緒に、今すぐあっちの世界に戻らなきゃいけないんだ」

由紀恵、腕時計 (伸雄からのプレゼント) を見る。

一時五〇分。

伸雄 「もちろん、お父さんもお母さんも圭太と別れたくなんてない。ずっと一緒にいたいと思ってる。でも、それじゃ駄目なんだ。あっちの世界に戻って一二時から始まる手術を受けて……。お前はな、生まれ変わらなくちゃいけないんだ」

由紀恵 「生まれ変わり、分かる？」

伸雄 「つまり、一度魂が白紙の状態になって、お前は全く別の新しい人間としてこっちの世界に戻って来られるんだ。そう、人生をもう一度最初から……」

由紀恵「あなた、圭太に分かるように」

伸 雄「ああ、そうか。……（圭太に）じゃあ、そうだ、新型だ。お前は新型圭太になれるんだ。どうだ、すごいだろう、かっこいいだろう？ だから、死神さんと一緒に行くよな？」

圭太、首を横に振る。

伸 雄「うん……。でも、一二時を過ぎると、あっちの世界には戻れなくなるんだ。そうすると、お前はいつまでもこっちにいられるけど、ずっと今の五歳のままになってしまう。……嫌だろう、そんなの。大きくなりたいだろう？」

圭太、伸雄にしがみつく。

伸 雄「圭太……」

圭太、首を強く横に振る。

伸 雄、困った顔で由紀恵を見る。

由紀恵「圭太、行かなきゃ駄目」

圭太、伸雄にしがみついたまま動かない。

由紀恵「ほら、早くしなさい」

由紀恵、圭太に手を伸ばす。

走って逃げ出す圭太。

由紀恵「圭太、行きなさいって言うてるでしょ、分からないの！」

驚いて足を止めた圭太、やがて、とぼとぼとドアに向かって歩き出す。

圭太の手を取ろうとするヒトシ。

しかし、圭太は急に由紀恵に駆け寄る。

鞆から何かを取り出した圭太、それを由紀恵に差し出す。

由紀恵「（受け取って）何？」

それは、ドングリがいっぱいに詰まった小さなビン。

手書きのラベルが貼られている。

クレヨンの幼い文字で、

「おしごとがなくなるすり」

由紀恵（気付いて）これ、あの時の……。誕生日プレゼントだったの？」

圭太、頷く。

由紀恵「圭太……」

由紀恵、感極まって圭太を抱き締める。

伸 雄「……由紀恵」

伸雄、由紀恵を立たせる。

圭太の手を取るヒトシ。

ヒトシ「じゃあ、いいですね。時間ないんで行きますよ」

由紀恵「……ありがとう」

ヒトシ「え？」

由紀恵「あなたには怒らなきゃいけないのか、謝らなきゃいけないのか、よく分からないけど……。ありがとう」

ヒトシ「……」

伸雄と由紀恵、笑顔で圭太に、

由紀恵「行つてらっしゃい、圭太」

伸雄「じゃあ、圭太。頑張れよ」

ヒトシに手を引かれた圭太、両親の方を振り返りながらドアの中に姿を消す。

○ 黄泉商会・ゲート室（夜）

ヒトシと圭太、「STAFF ONLY」のドアから入って来る。

クミ、営業部長、秘書、その他数人の係員が迎える。

営業部長、感激してヒトシの手を握り、

営業部長「君、よくやってくれた。ありがとう。私が責任を持つから、新しい担当地区は自由に選んでくれ。老人ホームがいいか？ それとも……」

秘書「部長、時間ありません。お早く」

営業部長「ああ、そうだな」

営業部長と係員たち、「NEXT」と書かれたドアの方に圭太を連れて行く。

クミ「（ヒトシの耳元で）両方ね」

ヒトシ「両方？」

クミ「食事と男」

ヒトシ「……」

圭太、ドアの前からヒトシを見ている。

ヒトシ「気付いて）何だよ、早く行けよ。……親父さんとお袋さん、次もきつと『当たり前』だろうからさ」

圭太、ヒトシたちに見送られて「NEXT」のドアをくぐる。

○ 公園（夜）

由紀恵の腕時計のアラームが鳴り始める。

伸 雄「一二時？」

由紀恵「うん」

空間に浮かんだドアが消えていく。

伸 雄「良かったな、圭太」

由紀恵「うん」

由紀恵、圭太からもらったビンを見つめる。

由紀恵「……」

伸 雄「……」

伸雄、由紀恵の肩を抱いて歩き出す。

寂しげな二人の背中。

由紀恵「ねえ、あなた……」

伸 雄「ん？」

由紀恵「この時計の説明書、早く見つけてね」

二人、けたたましいアラームの音と共に去って行く。

○ 高速道路「高瀬」出口(数年後)

字幕「数年後」

田園地帯にある高速道路の出口。

一台の軽自動車が出て来て、交差点の赤信号で止まる。

その車内。

運転席の肇と、助手席の綾香。

肇 「ねえ、さつき、高速降りたら運転代わってくれるって……」

綾 香「言ってるじゃない」

肇 「……」

綾 香「ほら、信号青」

車を発進させようとする肇。

しかし、エンジンは急に止まってしまう。

肇 「あれ……」

綾香、サイドブレーキが引かれていることに気付く。

綾 香「また……。(後部席を振り返り)これ触っちゃ駄目だって、いつも言ってるでしょ」

後部席に座った圭太に瓜二つの男の子(5)、暗い目で綾香を見返している。

綾香「もう。時間に遅れると、お爺ちゃん、またうるさいんだから……。(肇

に)ほら、あなた、早く車出して」

肇「うん」

軽自動車、のどかな風景の中を走り去って行く。

終